



ファーマリーズ・ギフト

J
O
K
E
R



R
E
K
O
J



幹谷 セイ

みきやbooks

登場人物

ディース

...主人公。十五歳。パートナーであるファーマリーを待ち続けている。

コール

...記憶喪失の謎の少女。名前はディースにもらった仮名。

ジーン

...森の中で出会った旅人。色白の美形。

ルーシー

...ディースの姉。十七歳。クラブ村のギフト責任者。

ソフィア

...ルーシーのファーマリー。

ギルバート

...アルコール中毒のおっさんファーマリー。ディースのお守り役。

ミーシャ

...ダイア村のギフト責任者。厳格で冷徹。

ジョーカー

...人間の子供を攫って行く道化の姿をした化け物。ファーマリー大嫌い。

やってきた妖精は、おっさんでした。

この世界の子供達は、五歳の誕生日を迎える時に、一生で一度の素敵な出逢いを果たす。

誕生日の夜、遠い遠い場所にある国から、妖精――ファーマリーがやってくるのだ。

ファーマリーは子供の良きパートナーとして、相棒である子供を守る。

ファーマリーを得た子供は自分のパートナーに多くのことを教え、また自らも学ぶ。

そうしてお互いに成長して、強く、立派な大人になるのだった。

僕も、五歳の誕生日を迎える前から、ファーマリーとの出逢いに夢と期待を膨らませていた。

たった一人の小さな、可愛い友達に、会いたくて会いたくてたまらなかった。

「もうすぐ、ディースのところにもファーマリーが来るのね。どんな子かしら、楽しみだわ」

姉のルーシーが、一緒に出迎えの準備をしてくれる。二つ年上の姉さんの側には、二年前にやってきた可愛い女の子のファーマリー、ソフィアが飛んでいる。

掌にちょこんと乗れるくらい、小さな妖精だ。

透き通った綺麗な羽を軽やかに動かして、幸せそうに姉さんの側にくっついていてた。

僕の側にも、もうすぐこんなファーマリーがやって来るんだ。

考える度に、待ち遠しくて体がざわついた。

ようやく、五歳の誕生日。

誕生日ケーキも、みんなからのプレゼントもそっちのけで、僕はファーマリーだけを待ちわびていた。日が暮れてからもずっとずっと、ファーマリーの到着を待ち続けた。

しかし、その日、ファーマリーはやってこなかった。

次の日も、また次の日も。

ずっと待っていたけれど、ファーマリーは来なかった。

「ねえ、ぼくのファーマリーは、いつくるの？」

両親に、何度も何度も訪ねた。

ファーマリーは「ギフト」と呼ばれる、人間とファーマリーとの仲立ちを行う職業に就いた者が連れてくることになっていた。

その人物の何らかの都合で、到着が遅れているのだと、説明された。

必ずくると信じて、僕は待ち続けた。

一週間経った。

まだ、ファーマリーは来ない。

「ファーマリーは、いつくるの？」

この一週間の間に、何度その言葉を口から吐き出したか。

それはもう、数え切れないほど。

親たちも、いい加減うんざりしていただろう。

だが、しつこく食いついて疎ましく思われるよりも、ファーマリーがやってこないことのほうが、当時の僕にとっては深刻で、恐ろしかった。

そして、一ヶ月目。

やってきた。僕の、ファーマリーが。

僕は心を躍らせながら、家の前にやってきたファーマリーを出迎えた。

その姿を見た瞬間、頭が真っ白になった。

ファーマリーの年齢は相棒となる人間の子供と同じ。まだ妖精の力を持たないため、`幼精、と表現される。

これから長い時間をかけて、二人で力を合わせて、一緒に成長していくのだ。

そう聞いていた、はずだったのだが――。

目の前に連れてこられた `それ、は、どこかおかしかった。

確かに、とっても小さくて、背中には薄くて綺麗な羽が生えている。

ファーマリーには、間違いない。

だが、そのファーマリーは赤い顔をしていた。口の周りには髭が生え、偉そうにあぐら胡坐を掻いている。

手には茶色い小瓶を握りしめていた。それを口に付け、グビグビと中身を飲む。飲み干すと、下品なげっぷをした。すると周囲に酒の臭いが広がった。

目の前にいる、僕のところにやってきたファーマリーは、僕と同じ歳とは思えない。

見ればすぐにわかる。こいつは子供ではない。

おっさんだ。

どこからどう見ても。

しかも、飲んだくれのアルコール中毒の。

僕の頭の中に広がっていた、ファーマリーの愛らしいイメージが、音を立てて崩れた。

そして、これから訪れるはずだった、ファーマリーとの楽しい生活も、まるで陽炎のごとく揺らめいて、蜃気楼のように消えていった。

ファーマリーには、ギルバートという名前が付いていた。

本来、ファーマリーは名前がなく、パートナーの子供がつけるのが通常だ。

とまあ、それだけの相違点が揃い踏みすれば、子供の僕でも気付けたわけだ。

「こんなのがう！ ぼくのファーマリーじゃないよ！」

僕は目の前の嘘を、即座に見破った。

僕の幼いなりの観察力に、両親も観念したようで、ゆっくりと諭すように、本当のことを教えてくれた。

このファーマリーは、父さんのファーマリーだった。

とっくに、人間の世界での修行を終えて、自分の国へ帰っていたが、父さんが呼び戻したらしい。

そして、僕が成人して大人になるまで、ここにいるそうだ。

僕はそれを聞いた上で、もう一度尋ねた。

「じゃあ、ぼくのファーマリーは、いつくるの？」

それに対する回答は、とうとう返ってこなかった。

それからというもの、僕は自分なりに必死で考えて、その疑問の答を出した。

きっと、ギルバートは「代わり」なのだと。

何らかの理由で、到着が大幅に遅れている僕のファーマリーが、ここへやってくるまでの間の。

だからきっと、僕のファーマリーはいつか必ず、やってくる。

そう信じた。

その日から、僕の「待ち続ける」日々が始まった。

あれから十年。

陽気な春の昼下がり。

僕は屋根の上に登っていた。

僕の家は村で一番大きい。なので屋根の上は、村で一番高い場所でもある。

そこに僕は、大きな旗を立てた。

「よしっ、これで遠くからでも、よく見えるぞ！」

白い、大きな旗。そこには大きく、黒い塗料でこのクラブ村のシンボル、三つ葉のクローバーが描かれている。

もちろん、描いたのは僕だ。その証拠に、クローバーの横に僕のイニシャルである「D」の文字も書き加えてある。

「なびいてますなあ」

気持ちのいい風に揺れる旗を見上げて、のほほんと呟いたのは、父さんのファーマリー、ギルバートだ。

今では僕のお目付け役として、すっかり側に居座っている。

相変わらず顔は赤く、手には酒瓶を握りしめて放さない。

最初の頃は体に悪いからと、無理矢理取り上げていたが、激しい返り討ちにあった経験があるため、今ではもう諦めて放置している。

庭に生えている背の高い木が、桃色の綺麗な花を咲かせている。

満開の花を眺めながら、のんびりと花見気分を満喫しているようだ。

そんなギルバートに、僕は自信満々に言ってやった。

「僕がこの旗を屋根の上に掲げたからには、お前のお役目も、そろそろ終わりだぞ。ギルバート」

ギルバートは酔った頭をふらつかせるように、首を傾げた。

「この旗は、目印なんだ。これが見えれば、きっと道に迷いはしない。まっすぐに、僕のところへ、やってこれるんだ！」

「何がですかな」

「とぼけるなよ、分かっているだろう？ 僕がずっとずっと、待っているものを」

遠くを見つめて、僕は笑った。

「ファーマリーだよ、僕のファーマリー！」

本当は迎えに行きたくらいけれど、自分の言うことを聞くファーマリーを持っていない子供は、村の外に出ることを禁止されている。

ギルバートは僕の指示なんて、ぜんぜん聞いてくれないし。

だからこうして、目印を立てるだけで精一杯なのだ。

でも、僕の計算が正しければ、あと少しなんだ。

あと少しで、ファーマリーは僕のところまで辿り着く。

「ディース！ そんなところで何をやっているの！」

下から声がした。屋根に手をついて覗いてみると、庭でこちらを見上げている一人の少女が。

「早く降りてきなさい！ 危ないでしょう！」

鬼気迫った表情で、僕に怒鳴りつけてくるのは、僕の姉のルーシー。側でホバリングしているファーマリーは、姉さんの相棒のソフィアだ。

「分かったよ。降りるから！」

僕は大声で返事し、裏に立てかけてあった梯子を使って、地上に降りた。

そして姉さんのところへ駆けていく。いつの間にかギルバートも僕の横にいた。

「まったくあなたは……。落ちたらどうするつもりですか」

姉さんは、僕より二つ年上の一七歳。長い髪をおさげにして、肩から手前へ流している。おっとりとしていて柔らかい物腰のため、あまり怒っていても、怖そうには見えない。

でも、他人には一見分からない表情の変化も、長年一緒に暮らしてきた僕にはよく分かる。姉さんは、かなり怒っていた。

でも僕は、悪いことをしていたわけじゃない。その辺りを分かってもらいたい。

「姉さん。僕は屋根の上で……」

「まあ、そんなことをしていたの!？」

「まだ何も言ってないって！」

これ見よがしに驚いてみせる姉さんだが、いったい何に驚いているのか。それは当人にしか分からない。

姉さんはハッと慌てた様子で我に返り、ばつが悪そうに俯いた。

人の話を最後まで聞かない、そそっかしいところが姉さんの欠点だ。

何とか直そうと頑張っているみたいだが、その道は、なかなか険しそうだ。

姉さんは少し頬を赤らめて、小さく咳払いをした。

「と、とにかく。何をしていたにせよ、あまり心配を懸けさせないで」

「ごめん。もうしないからさ」

「ところで、あの旗は何？」

さっきの話の続き、と言わんばかりに、空を見上げて訪ねたのはソフィアだった。金髪碧眼の、可愛らしいファーマリーだ。

十年以上、人間の国で生活をして、見た目は成長して年相応の女性の姿だが、その大きさは初めてやって来た時と変わらず、掌に乗せられるくらい、小さい。

ソフィアの問い掛けに、僕は目を輝かせた。

「よくぞ聞いてくれました！ あれは目印だよ、ファーマリーが迷子にならずに、ここまでくるための！」

僕は意気揚々と返答した。姉さんが、ぴくりと表情を引き攣らせ、強ばらせた。

「ファーマリーって、あんたの？」

「そうともさ」

「ふーん。でも何で今頃、旗なんて立てる気になったわけ？」

「よくぞ聞いてくれました！ またしても！」

僕はズボンのポケットから、折り畳んだ紙を取り出した。

それは、この世界の全貌を写し取ったといわれている、地図の縮小版だ。

世界は限りなく広い。この小さなクラブ村なんて、自分でおおよその見当をつけて印を付けなければ、どこにあるのか分からないほどだ。

実際、世界なんて見たことがないから実感がわかないけれど、僕の好きな地質学者の書いた本に載っていたものだから、信用している。

「いいか、ここがファーマリーたちの国がある島だ」

僕は地図の一番左端を指した。そこには地図で見ると小さいが、そこそこ大きいと思われる島があり、「妖精島」と書かれていた。

「んで、その隣の大きな大陸の、真ん中あたりにあるのが、このクラブ村だ」

妖精島から海を隔てて少し東へゆくと、地図のほとんどを占める大きな大陸がある。その中央付近に、僕が付けた印がある。

「仮に、ファーマリーがギフトの人に、いろんな交通機関を使って連れてきてもらったら、一月くらいでこの間に行くことができるんだよ。でも、もし何らかのハプニングが起こって、ギフトの人とはぐれたとしたら、歩いてこなくちゃならない」

これはあくまで僕の仮説だけれど、僕のファーマリーがやってこなかった理由は、きっとギフトの人と離ればなれになってしまったからだと考えている。

大陸を横断するための交通機関に乗るには、主要な都市に行かなくてはならないし、ギフトの持つ特別な許可がないと、ファーマリーが単独で乗ることはできない。

だから必然的に、ここへ来るには徒歩になる。

「何とか海は越えられたとする。この大陸の西の端から、この村までを道なりに進んでいくとして、おおまかにその距離と時間を計測すると、十年くらいかかる計算になるんだよ」

僕は自分の解説にだんだん熱くなってきた。拳を握りしめ、さらに熱演する。

「つまり！ 僕のファーマリーが十年前からここへ向かってきているとすれば、もうそろそろ、ここへ辿り着くわけだよ！」

「なるほどー。あったまいいわねー、あんた」

ソフィアは感心していた。ギルバートはケケケと不気味に笑っていた。

しかし、姉さんは浮かない顔だった。

「でもさー、その計算って、ファーマリーがこの距離を同じ速度で淡々と歩いてきたらって話でしょ？ やっぱり旅に障害は付き物でしょう、どこかで道に迷ったり、倒れちゃったりしたら、もっと遅くなるんじゃないの？ 最悪、来れないとか」

「不吉なこと言うなよ。それに遅れたって大丈夫さ。こうやって旗を立てておけば、遠くにいて

も見えるはずだし。遅れようが何しようが、僕はいつまででも待つから！」

僕の言葉を聞いて、姉さんは何か大きな決断をしたような表情を見せた。

「ディース。あなたに見せたいものがあります。ついていらっしやい」

「え？」

僕の返事も聞かずに、姉さんは家の中へ入ってってしまった。

僕たちは顔を見合わせ、すぐに姉さんの後を追った。

あなたのファーマリーは

僕の父さんは、このクラブ村の村長だ。

つまり僕は村長の息子ということになる。よって、村一番の大きな家に住んでいるということも、納得がいくだろう。

村長は村の治安を守るとともに、もう一つ大きな役割を持っている。

それが、ギフトだ。

ギフトは人間とファーマリーとの間の仲立ちをするために作られた組織で、子供のところにファーマリーを連れてきたり、ファーマリーにまつわるトラブルを解決したりするのが主な仕事だ。

ギフトを取り仕切り、困難な仕事を続けている父親を立派だとは思うけれど、それだけすごい職に就ける技量があるんだったら、せめて自分のファーマリーの酒癖を改善するくらいはしておいてほしかったものだが。

その点においてだけは、ちょっと尊敬しきれない。

ギフトの責任者的な立場にある両親は、国中を飛び回ってギフトの仕事を行っている。村にいることは滅多にない。

なので現在、村のギフトを取り締まっているのは、僕の姉さんだ。

僕の家は二階が居住区になっていて、一階がギフト専用の事務所となっている。

ここで住民からの依頼を受けたり斡旋したり、ギフトの一員として働く人たちの世話をしている。

僕も早くギフトの一員になって、村の外で活躍したいと思うわけだが、ギフトに入るための資格は、僕には越えられない壁そのものだった。

それなりの力を持ったファーマリーを連れていることが、第一条件だからだ。

今の僕にはとうてい、不可能だった。

でもでも。

もうじき僕のファーマリーがやってきて、一緒に訓練とかして、想像を絶するスピードで成長して、一気にギフトの仲間入りを果たす！

僕の夢は達成間近だ。なんだかワクワクする。

と、高揚する気分を押さえながら、僕は姉さんについて事務所へとやってきた。

そこは応接間のような間取りになっていて、中央にテーブルがあり、椅子が四つ、置かれている。今はそのどれもが手持ち無沙汰といった様子で、誰にも座られることなく、寂しげだ。

さらに奥に、責任者用の机が置かれている。本来なら父さんの座るべき場所だが、今は姉さんが代わりに使用している。

机に腰を下ろし、姉さんは僕に机の前に立つように目で指示した。

「ディース。あなたももう十五歳です。お父様やお母様は、大人になるまで黙っているようにと仰っていましたが、私はもう、あなたに本当のことを話してもよいと考えています」

僕が定位置に着くと、姉さんはゆっくりと口を開いた。

「何の話？」

僕は首を傾げる。姉さんは背後の本棚に埋まっている金庫を、ダイヤルを回して空けた。

その中から取り出した、小さな箱を机の上に置き、開いて見せた。

僕やソフィア、ギルバートは、箱の中を覗き込む。

「これって、ファーマリーの羽じゃないの？」

ソフィアが言った。

薄くて透明で、枝分かれした木みたいな綺麗な筋の入った、鱗のようなもの。

たしかに、それはソフィアやギルバートの背中にあるものと、よく似ている。

それよりも小さく、途中で千切れていたが。

「これは十年前に、この村を訪れたギフトの方が持ってきたものです」

姉さんが語り出す。僕は静かに、耳を傾けた。

「あれは、あなたの五歳の誕生日のこと。ファーマリーの到着を心待ちにしていたあなたのために、お父様は村の外までギフトの方を迎えに行かれました。覚えていますか？」

「覚えている。でも、結局その日は来なかった。父さんは一人で戻ってきた」

「ええ。ですがその時、お父様はギフトの方と会ったのです。そして、そのギフトの方が、ファーマリーを連れて来れなかった事実を知ったのです」

「それは、どうして……？」

胸がざわついた。

嫌な予感、とでも言うのだろうか。

聞いたらもう、後戻りはできない。そんな感じがした。

でも、聞かずにはいられなかった。

「ここへ向かう旅の途中、ファーマリーを狙う輩に襲われたのだそうです。その人はファーマリーを安全な場所へと逃がしました。何とか敵を撃退し、逃がしたファーマリーをすぐに探したそうですが、どこにも姿はなく、この羽だけが落ちていたそうです」

僕は息をすることすら、一瞬忘れていた。

ただ心臓が激しく打つ音だけが、やけに頭を震わせた。

「その後も ^{しらみつぶ} 風潰しに探したそうですが、結局見つからず、その人だけが報告にとクラブ村へやってきたのです。その経緯から察するに……」

姉さんは目を伏せた。僕と目を合わせないように、必死になっている。

「……あなたのファーマリーは、もうこの世にいないでしょう」

僕は、ぽかんと口を開けて立ち尽くし、頭の中が一瞬真っ白になった。

今、何て言った？ 姉さんは何て言ったんだ？

言葉は聞こえた。しかし、意味がなかなか理解できない。理解すまいと、僕の頭が頑張っているみたいだ。

そんな僕の様子を察してか、姉さんはもう一度、ゆっくりと、かみしめるように言った。

「あなたのファーマリーは、ここへやってくる前に、死んでしまったのです」

「う、嘘だ……。嘘だ、そんなの！」

頭が正常に働いて、言葉の意味が理解できた。

その瞬間、僕は一步後ずさり、必死で否定の言葉を吐き出していた。

「千切れた羽があるということは、何者かに襲われたと考えて間違いないです。まだ何の力も持たない、幼精であるファーマリーが、それに対抗できるとは思えません。仮にその時に生き延びたとしても、とても一人で、ここまで辿り着けるとは……」

「そんなの、そんなの……」

僕は拳を握りしめていた。同時に、目には大量に涙がたまっていた。

俯くと、涙が堰^{せき}を切って流れ出した。顔を上げられなかった。

僕は、ずっと待っていた。

ファーマリーは必ずやってくると、信じて疑わなかった。

なのに、それは信じるだけ無駄だったのか。

僕の計算も考えも、すべて机上の空論だったというのか？

期待だけを支えに、目標に生きてきた僕は、僕は――。

「だったら、僕はこれから、どうすればいいんだよ！」

僕は踵を返して、掛けだしていた。

姉さんが背後で呼び止める声がしたが、無視して部屋を飛び出した。

走って、走って、走り抜いて。

周囲に目もくれずに走り続けた結果。

僕は見慣れぬ場所に立ち尽くしていた。

辺り一面、短い草と岩が広がる平野。

ふいと後ろを振り返ると、村の門と思わしき木の柱が遠くに見えた。

どうやら僕は、村の外にまで飛び出してしまったらしい。

子供がファーマリーを連れずに村の外へ出ることは、タブーとされていた。

門を抜けて、外へ出るなんて、生まれて初めてだ。

だが、そんなことはもう、僕にはどうでもよかった。

叱られたって、お仕置きを受けたって構わない。そんな気分だった。

どのみち、僕はもう大人として認められるまで、村から出ることはない。

だって、僕のファーマリーは、もうやっでは来ないのだから。

姉さんから聞かされた事実が、僕の心に重くのしかかる。

今、そんなことを知らせて、僕にどうしろっていうんだ。

僕は側にあった、地面から飛び出た平たい岩に腰を下ろし、深く息を吐いた。

こんな場所に逃げてきたって、何も変わらない。ちゃんと、分かっている。

ファーマリーがもう、この世にいない。

その事実を知ったのならば、その後のことを考えなければならない。

でも、何をどうすればいいのか、全く浮かんでこない。悲観に暮れるしかできない。

今まで、ファーマリーがやってくることを前提で、そいつを出迎える未来ばかり考えていたから。

こんな事態は、全く想定していなかったんだ。

僕はまた、息を吐いた。

「……どうして、どうして僕にはファーマリーがないんだ」

呟いたところで、世界の何かが変わるわけではない。

僕の言葉に、そんな影響力は微塵もなかった。

だが、その言葉は、予期せぬものを呼び寄せた。

[へえ。チミには、ファーマリーがないのかい？]

背筋がぞくりとし、凍り付いた。

背後から、何者かに肩を掴まれる。

いつの間に、こんなに側まで来たんだ？

気配なんて、全く感じなかったのに。

「そいつ、は気付かないうちに、僕の背後にいた。」

緊張で固まった首を何とか回し、横を見る。

僕の顔のすぐ横に、もう一つ顔があった。

おしろい
白粉を塗りたくった顔。鼻の先端は赤く、口の周りも、赤い口紅で分厚く塗ってある。

目の周りは星の形や、滴の形の模様で囲まれている。

以前、本で読んだ。

こんな姿をした連中は「道化」と呼ばれ、サーカスや路上で人を笑わせることを生業とする人間だ。

だが、僕にとりつくように張り付いているこいつは、決して人間ではなかった。

その奇妙な化粧顔は、大きな分厚い板の平面から、お面みたいに飛び出していた。板はトランプの絵柄が描かれていて、複雑な模様に覆われていた。

その板がこいつの身体らしく、両側面から、黒いゴムチューブのような腕や足が伸びている。大きな白い手袋を嵌めた手が、僕の肩を掴んでいた。

おおよそ、人間とは思えない容姿。

こいつはいったい、何なんだ？

[ハジメマシテ。ボクは、ジョーカーの手下。ジョーカーの命令で、チミのような子供を探していたのさ。ファーマリーのいない、かわいそうなチミを探していたんだよ]

そいつは僕の思考を、疑問を読みとったかのように、名乗った。

その名前を、僕は以前読んだ本の内容から、おぼろげに知っていた。

ジョーカー。

人間、そしてファーマリーに次ぐ、高度な知能を有する生命体。

だが、その正体はほとんど分かっておらず、謎に包まれている。

ジョーカーは慎重で警戒心が深く、よっぽどのことがない限り、人前に姿を現さない。

何か行動する目的を有する時には、自らが命を削って生み出した分身である手下を駒として動かし、用事を果たす。

現在、分かっていることといえば、そいつらが人間の天敵であるということくらい。

ジョーカーは、人間の子供が大好きだ。

昔は、よく子供が^{そそのか}唆されて、奴らの餌食になっていたと聞いた。

奴らは言葉巧みに子供を誘い、近付いて、そして油断させ、襲うのだ。

今、僕にこうして接触しているように。

「僕を、探して……？」

警戒しつつも、僕は目の前に現れた化け物——ジョーカーの手下と、対話を試みた。

[そうとも。チミを迎えに来たんだよ。さあ、ボクと一緒にいこうじゃないか、苦しみも悲しみもストレスもない、楽園のような場所へ]

「楽園のような……」

一瞬、頭が真っ白になってしまった。

苦しみも、悲しみもない楽園。

今の僕には、とても行きたい、思い焦がれる、そんな場所だった。

[うふふ、揺れている。心が揺れているね。チミは今、とても疲れているはずだ。傷ついたチミの心を癒してくれる、そんな場所があるのなら、行ってみたいだろう？]

それは、すごく思う。

だが、それ以前に、疑問にも思った。

「でも、どうして、そんな素敵な場所に連れて行ってくれるジョーカーを、みんな恐れるんだろう」

[そうだね、その通りだね。残念なことに、人間はファーマリーに^{だま}騙されているのさ。ファーマリーは人間が楽をすることを由としない。だから、人間が子供の頃から張り付いて、監視して、洗脳するんだ。「ジョーカーは悪い奴だ」と。ボクたちやジョーカーはファーマリーに^{めざめ}弱いから

らね。ファーマリーに見張られている人間を、楽園に連れて行ってあげられないんだ。目障りなファーマリーめ！]

ジョーカーの声色に、憎しみがこもった。

僕に対してではなく、会話の中の話題である、ファーマリーに向けて。

[でも、チミは大丈夫。ファーマリーの呪縛から解き放たれ、騙されていたことに気付けた賢い人間は、ボクたちと一緒に楽園に行く権利がある。さあ、共に行こうじゃないか。全ての苦しみから解き放たれた、素晴らしい世界へ！]

歓喜にあふれた不気味な表情で、ジョーカーの手下は演技過剰に言う。

だが、その高揚する相手の物言いに、僕の心が動くことはなかった。

「いや、僕は無理だよ」

[なぜ?]

「だって、僕、ファーマリーに騙されていたわけじゃないし、自分のファーマリーにすら会ったことがないんだから。洗脳される以前の問題だ。そんな僕には、楽園へ行く資格なんてないんだよ」

僕が気持ちを伝えると、ジョーカーの手下の表情が、みるみる歪んだ。

影を落とし、深い彫りが顔中に現れる。

[グダグタとゴタク並べてないで、来いっつったら、来りゃいいんだよ、このクソガキが!]

ジョーカーの手下の態度が変わった。

本性を出した、というべきか。

[テメーの不幸話なんか知るか、こっちはファーマリーを連れてない、襲いやすいガキを見つけたら攫ってくる。それだけのために、日々生きてんだよ!]

ドスの利いた声。

僕の胸倉を掴んで、怒鳴りつけてくる。

「何だよ。楽園なんて、嘘だったのか？」

僕は呆れ混じりに言ってやった。

内心は、怖くて怖くて、たまらなかったけれど。

そんな気持ちを、なるべく悟られないように、頑張って平常心を保った。

[嘘なんて、吐いちゃいないさ。ボクたちは、チミたちを楽園へと連れていく。苦しみも痛みもない、素敵な場所へ。ただし、その場所を幸せと感じられるかどうかは、保証できないけれど]

ジョーカーの手下は、少し冷静を取り戻したらしく、元の口調に戻った。

屁理屈じみた、僕を小馬鹿にした物言いだった。

[どのみち、チミに拒む権利はない。力づくでも連れていくよ]

「僕は、二度と会えなくなつて、ファーマリーを信じている。ファーマリーを信じる僕自身を、信じているんだ。僕はファーマリーが人間を騙すなんて思わない。ファーマリーを敵視して、悪くけな貶す奴は許さない！」

僕は素早く相手の手をふりほどき、地面に重心をかけた。

そして、ジョーカーの手下の身体を、一気に押し倒す。

油断していたのだろう。体のバランスを保てなかったジョーカーの手下は、仰向けに地面に倒れ込んだ。

[のああっ！ てめえ、何しやがる！ 起こせ、起こせよ！]

起こせ、と言わせて起こすほど、僕は馬鹿ではない。

あの平べったい身体だ。一人で起きあがるなんて、至難の業だろう。

奴がじたばたしている際に、僕は逃げ出した。

友の仇

とりあえず、元来た道を引き返し、僕は駆けた。

村に戻ろう。村の中までなら、奴は追ってこない。

だって、今まで一度も、村の中であんな化け物を見た記憶はないのだから。

万が一、押し入ってきてても、村にはたくさん戦えるファーマリーがいる。姉さんだっている。

真っ向からぶつかれば、負けるのはあいつのほうだ。

そう考えながら、走り続けた。

しかし、その考えはすべて、甘かった。

[追いついたよ、うふふ]

音もなく、再び僕の真横に道化の顔が浮かび上がる。

僕は悲鳴を上げた。

足下の石に、^{つまづ}躓いて倒れる。

逃がすまいと、奴は起きあがろうとする僕の頭を、押さえつけてきた。

「そんな、簡単に起きあがれるわけ……」

[ボク自身が、自分の弱点に気付いていないとでも思ったのかい？ ねえ、どうしてボクが、自分の欠点をあからさまに分かる状態で放置しているのか、分かるかい？]

僕が答えられずにいると、ジョーカーの手下は不気味に笑った。

[そこを突いてきた相手に「やられた！」と見せかける。相手は油断する。その隙を狙うのさ。今のチミを、捕まえたようにね]

僕を馬鹿にして、笑い声はさらに大きくなる。

[それにしれも、ずいぶん思いきって押し倒してくれたね。背中が痛くてかなわんよ。チミのような元気のいい子は嫌いじゃないけれど、元気が良すぎるのは考えものだね。ジョーカーのところへ連れて行って、お灸を据えてもらうのもいいけれど、おイタをする子は食べてしまうことにしようか]

ジョーカーの手下の口が、バククリと開く。

その口は、もはや標準サイズではない。顔が横一文字に開き、顔の両端まで口が裂けていた。

あの口の大きさなら、僕の頭なんて一飲みできそうだ。

口の中には、鋭い牙が規則正しく並んでいる。

食われる。

僕は硬直した。

「子供をジョーカーのところに連れて行くのが、お前の役目なんだろう？ 食べちゃったら、ジョーカーに怒られるんじゃないのか？」

[なに、ばれなきゃいいのさ。それに、ジョーカーは何でも言うことを聞く、いい子をご所望だからね。チミではジョーカーのお眼鏡に適いそうにもない]

もう、僕の脅しにも、乗るつもりはなさそうだ。

――逃げられない。

恐怖が身体機能を停止させ、身体が言うことを聞かない。

目を閉じることさえ、できなかった。

ただ、目の前に迫りくる、巨大な赤い口を、見つめていることしか。

[ぎゃあああああ!!]

だが、僕がその口の中に吸い込まれることはなかった。

ジョーカーの手下が突然吹き飛び、再び地面に倒れた。

何が起こったのか分からない。なんとか身体を起こすと、目の前に二人の女性が立っていた。

「うちの弟に、手を出さないで！」

「ね、姉さん……」

一人は、姉さんだった。

珍しく本気で怒った顔で、倒れたジョーカーの手下を睨みつけている。

そして、もう一人。

白銀の、軽装の鎧を身に纏^{まと}った、金髪碧眼の美女。

手には両刃の直剣を握りしめ、こちらに向けて、翳^{かざ}して構えていた。

ジョーカーを吹き飛ばしたのは、この剣だろう。

人間と同じ姿、大きさをしているが、その背中には薄い透明な、丸い羽が一对ある。

そう、彼女は姉さんのファーマリー、ソフィアだ。

ファーマリーは成長すると、人間と同じ大きさの姿を取ることが可能になる。その際には戦闘能力が著しく上昇し、主人である人間を守るための、強靱な戦士となる。

[うぐうっ！ あと少しだったのに！ いいさ、どうせボクに目を付けられた時点で、チミの運命は決まっているのさ。ジョーカーに食われるという運命にね]

ジョーカーの手下は、忌々しようにソフィアを睨みつけた。そして、僕を見て笑った。

吹き飛ばされたダメージがかなり大きかったらしく、身体である板には、修復できなさそうな罅^{ひび}が刻まれていた。

ソフィアは、その牽制^{けんせい}に臆することなく、切っ先をジョーカーの手下に突きつける。

[ボクがここでやられても、突然消滅したボクを怪しんで、仲間が様子を見に来るだろう。そうすれば、チミは見つかって、連れて行かれる。ジョーカーの餓食^{えじき}になるしかないのさ!]

ジョーカーの手下は狂ったように笑い叫ぶ。

「うるさい、さっさと消えろ」

ソフィアの、とどめの一撃。

剣を刺し、奴の身体を貫いた。

ジョーカーの手下は、断末魔の悲鳴をあげる。

その声もまた、笑い声だった。

[ヒヤハハハハハー!!]

そして、粉々に霧散して、風に流されていった。

「ディース、怪我はありませんか？ あいつに、何もされなかったでしょうね？」

何もできずにへたり込んでいた僕に、姉さんが駆け寄ってくる。

僕の無事を確かめて、安堵の息をついた。

「一人で村の外に出ては駄目でしょう？ 奴らが、常に彷徨いながら、狙っているのですから」

姉さんの口から、ジョーカーたちについて情報を聞いたのは、初めてだ。

だから僕には、本で読んで知った知識しかなかった。どうしても気になる程でもなかったし、詳しく聞こうとはしなかった。

姉さんは僕が奴らについて知っているとは思わなかつただろうし、また、どうせ僕は外に出られないのだから、話す必要はないと思っていたのだろう。

だが、それもいい加減、危険だと感じたらしく、姉さんはジョーカーについて知りうることを

語り始めた。

「ディース。あなたのファームリーの命を奪ったのは、あのジョーカーの手下や、ジョーカーなのですよ」

その言葉に、僕は一瞬、固まった。

「ど、どういうこと？」

「あなたには酷だと思い、特に話そうとはしませんでした。でも、勉強熱心なあなたならば、ジョーカーがどういう存在か、ちゃんと知っているのでしょうか？」

僕は、何の躊躇^{ためら}もなく頷いた。

早く、話の続きが聞きたい。そのための最短の返答をして、目で訴えた。

「ジョーカーは昔から人間と敵対した存在でした。ジョーカーは人間の子供を食べてしまうからです。しかし、ジョーカーと真っ向に戦える人間は、数が知れていました。だから大きな被害を防ぐために、人間はファームリーと同盟を結んだのです。人間の子供は、単独での成長が困難だと言われているファームリーの幼精を育てる。その代わりに、ファームリーは人間の子供が大人になるまで守る、というものです」

そういった、ジョーカーと人間、そしてファームリーが関わってきた大陸の歴史は、本で読んで何となく知っている。

僕は頷きながら、姉さんの話の中から、僕の知らない情報を読み取ろうと集中した。

「その同盟によって、ジョーカーの被害は減りました。ですが、食い扶持の減ってしまったジョーカーは、何とか食事にありつこうと、先手を打って来るようになりました。……ファームリーが子供のところへ辿り着く前に、殺してしまうのです」

顔から、血の気が引いた。

話している姉さんの顔も、青褪^{あおざ}めている。

「一人の子供につき、派遣されるファームリーは一体と決められています。つまり、早い段階でファームリーを失った子供なら、ジョーカーたちは容易に襲うことができるのです。さっきの

あなたみたいに」

「そ、んな……」

僕のファーマリーは、ジョーカーに殺された。

さっきの不気味な連中が、よってたかって、無抵抗なファーマリーを……。

僕の中に怒りが浮かんだ。

だがそれは長続きせず、絶望に変わった。さっきの手下は、ほんの下っ端の化け物だ。親玉はもっと強く狡猾で、恐ろしい。

僕の力では歯が立たない化け物に、何ができただろう。

姉さんが来なければ、僕だって、ファーマリーと同じ運命を辿っていたかも知れないのに。

「ギルバートを呼び寄せたのも、ファーマリーを失ってしまったあなたが、ジョーカーに襲われなかったための、苦肉の策だったのです。あなたには酷だったかもしれませんが、でも、お父様やギルバートを責めないであげて。あなたがファーマリーの二の舞にならないように、そうするしかなかったの」

姉さんは申し訳なさそうな顔をした。姉さんが悪い訳じゃないのに。

気を遣わせていることに、とても自己嫌悪した。

「本当のことを話すのは、やはりまだ、時期が早すぎたかもしれません。でも、いつまでもファーマリーがやってくると信じて、待ち続けるあなたを見ているのは、心苦しくて。その期待が膨らめば膨らむほど、後の絶望も大きくなるのではと……」

姉さんは後悔している様子だが、僕は話して貰えて良かったと思っている。

真実を知ったお陰で、僕は考えを修正できる。早い段階で。

たしかに、ファーマリーは殺されてしまった。

でも、ファーマリーがいなくても、僕は今まで、十年もの間、生きてきた。二度とファーマリ

一に会えなくても、僕は大人になる。

いろんな人に守られてながら、生かされてきた。

そのことには、きっと何か意味があるはずだ。

僕が、見出していかないといけないんだ。

「……とにかく、戻りましょうか。またジョーカーの手下がやって来ないとも限りません」

姉さんは立ち上がる。

僕は姉さんを見上げて、意を決して言った。

「姉さん。僕にも、ギフトの仕事をさせて」

姉さんは目をぱちくりさせる。

「どうしたんです、いきなり」

「ギフトでの労働条件は、十五歳以上で、基本的に自分のファミリーを連れていることだ。でも例外で、「自分の力でジョーカーと戦い、倒すことができるもの」というものがあつたはずだ」

ジョーカーのことはあまり眼中になかったが、いずれはギフトの一員として活躍したいと思っていた僕は、その勉強に余念がなかった。

そんなことまで知っていたのか、と言った表情で、姉さんは少し呆れたようだった。

「今の僕には、ジョーカーも、ジョーカーの手下すらも倒せない。でも、このまま何もせずに、じっとしているなんて嫌だ。どんな簡単な仕事でもいい。見習いとして、実力をつけていきたいんだ。僕は一人でも、必ず、強くなってみせる」

「ディース……」

「少しでも、前に進みたいんだ。死んでしまった、ファミリーの分まで」

今の僕に、何ができる？

村から一步も出ず、家に閉じこもって、大人になるまでファーマリーの陰を追いかけて悲観に暮れることか？

いいや、そんな生活は、絶対に^{ごめん}御免だ。

僕は生きている。

ならば、前に進み続けなくてはいけない。

それすらも叶わなかった、ファーマリーの分も、進み続けなくては。

それが、今の僕のやるべきことだ。

「あなたは、私が思っているよりも、ずっと成長しているのですね」

それを聞いて、姉さんは優しく笑いかけてくれた。

元の大きさに戻ったソフィアも、姉さんの肩の上に座って、笑っている。

「分かりました、あなたに仕事を任せます。でも、今日は家に戻って、ゆっくり休みなさい」

姉さんは僕に手を差し伸べてきた。

僕はそれを掴んで、起きあがった。

そのまま手を繋いで、歩きだした。

普段だったら、こんなのは恥ずかしくて嫌だと、突っ撥ねていただろう。

でも今日は、離したくなかった。

姉さんも、何も言わなかった。

ただ、黙って手を握り返してくれた。

姉さんの手は柔らかくて、温かかった。

大きいと思っていたけれど、いつの間にか、とても小さくなっていた。

こんな風に並んで歩くのは、もう最後になるかも知れない。

一人で進み出すのだ。姉さんには迷惑をかけたくない。

今度は、僕が姉さんを助けて、支えてあげられるくらい、強くなるんだ。

そう決心して、村へと帰った。

ギフトの試練

家に戻って食事を済ませた頃には、陽もとっぷり暮れていた。

自分の部屋に戻り、僕は荷造りに取りかかった。

ギフトとして働き始めれば、自分の身は自分で守らなくちゃいけない。

ジョーカーと遭遇したとしても、どっしり構えて戦うなんて芸当は、今の僕にはできないだろう。

逃げつつ、相手の動きを交わしつつ、知恵を絞って奇襲をかけるとか、そういった方法しか思いつかない。

だから、できるだけ装備は身軽にしておかなくてはいけない。

荷物も、極力少なくだ。

とりあえず、当面は金だろうか。

任務にどのくらい時間がかかるかは分からない。服とか食料とかは、適宜適宜に調達すれば問題ないだろう。

今までに特に、お金を払ってまで欲しいと思ったものがなかった僕の懐は、意外と温かい。お小遣いなんて、今までほとんど使ったことがないし。

自分のお金を使って、ものを買ったことなんて、数えるほどだ。

振っても音もしないほど中身の詰まった貯金箱を、リュックに入れる。それだけ詰めると、他は特に何も要らないような気がした。

それでも、と思いだし、この辺りの地図とか、コンパスとか、簡易なナイフ、携帯食料などを、家中からかき集めてリュックに詰めた。

そして最後に、僕は机の引き出しを開けた。

一番奥に押し込まれていた、小さな包み紙を取り出して、開く。

中に入っていたのは、小さな髪飾り。

虹色の光沢を持つ、羽ばたく鳥の横姿を形どった、綺麗な髪飾りだった。

もちろん、僕がつけるわけではない。姉さんにプレゼント、もしない。

数年前、僕が初めて小遣いを貯めて買ったものだ。

これからやってくると思っていた、ファーマリーにあげるために。

あの頃は、いや、数時間前までは、それが当然だったんだ。

ファーマリーが自分のところへやってくることも、このプレゼントをあげれば、喜んでくれただろうことも。

何もかも、二度とあり得ない夢物語になってしまったけど。

髪飾りを再び包み直し、リュックの角に大事に入れた。

もう、ファーマリーはいないけど、ファーマリーに頼らずにやっていかなきゃいけないけど。

少しでも、勇気をくれるんじゃないかと思ったから、一緒に居られる気がしたから。

この贈り物も、一緒に連れていくことにした。

僕の荷造りは、おおかた完了した。

ふと横を見ると、ギルバートも何やら、せっせと荷造りをしている。

こいつも、^っ従ってくるつもりなのだろうか。

まあ、それがこいつの仕事なのだし。僕を見守るために、こいつは人間の国に留まっているのだから。

別に従ってくるなどとは言わない。

でも僕は、こいつの力は絶対に借りない。

借りるほど、力があるようにも思えないんだけどな、この酔っぱらいには。

従いてきたかったら、勝手にすればいいさ。それくらいの気持ちでいることにした。

ギルバートも、自分なりに必要と思うものを、古くさい形の小さなトランクに詰めている。

酒とか、酒とか、酒とか……。

「つーか、お前は酒しか持っていかんのか！」

「ケケケケ」

僕が思わず突っ込むと、ギルバートは奇妙でかつ、楽しそうに笑った。

こいつの笑い方は、もはや妖精ではなく妖怪の域に達している。何とも不気味だ。

「ったく、いったい何をしに行くんだよ……」

僕が呆れていても気にする様子もなく、ギルバートは黙々と酒を詰めるのだった。

◆ ◆ ◆

翌朝。

僕は準備を整えて、一階の事務室へと足を踏み入れた。

姉さんは既に奥のデスクに座って、待っていた。

「おはようございます、ディース」

「おはよう、姉さん」

いつも通りの朝の挨拶。

しかし空気は張りつめていて、全然いつも通りには思えなかった。

僕は部屋を横切り、姉さんの目の前へ。

姉さんは横目で、隣にいたソフィアに指示を送った。ソフィアは頷いて、側に置いてあったとりかご鳥籠を運んできた。

「それでは、さっそくあなたに、お仕事を頼みます」

そう言って、姉さんはその鳥籠を目の前に置かせた。

「これは、ファーメリー……？」

捕まって、籠の中に押し込められ、座り込んで俯いている、女の子のファーメリー。

「このファーメリーは、隣村に住む、ある女の子のパートナーなのですが、数日前に大喧嘩をしたらしく、家を飛び出して、行方不明になっていたのです」

「喧嘩ね……。喧嘩するんだ、人間とファーメリーって」

人間とファーメリーっていうのは、仲がいいものじゃないのだろうか？

ファーメリーと喧嘩するなんて、僕には想像もつかない。

「そりゃ、どっちも知恵のある生き物同士。時には意見の食い違いだって、あるでしょうよ」

ソフィアが言った。僕は「なるほど」と納得した。

僕だったら、絶対に仲違いなんて、しなかつたらうけどな。

とか考えながら、姉さんの言葉の続きを待つ。

「近隣の村々に搜索願いが出されていまして、この村のギフトによって、何とかファーメリーを見つけられたのです。そして任務完了の報告に行ったのですが……」

姉さんは言葉を濁す。ちょっと困った表情だ。続きは、ソフィアが代弁した。

「そのパートナーの女の子も、家を飛び出したっきり、まだ見つからないんですってよ」

「どっちも家出したの？」

僕は少し呆れた。

いったい、どんな喧嘩をしたら、そこまで大騒ぎになるんだろう。

「行方が分からなくなってから、もうかなり経つそうです。ファミリーも連れていませんから、ジョーカーに襲われてしまう危険も。そこであなたには、その女の子の捜索をお願いしたいのです」

迷子探し。初めての任務としては上々の仕事だ。僕は大きく頷いた。

「わかった。で、その子の名前は？ あと、特徴とか」

人探しは、簡単そうに見えて、以外と難しい。

相手の行動パターンが分からなければ、見当違いな場所を探して労力を無駄遣いする可能性もあるし、根気や観察力が必要だ。

それでも難易度は、いかに情報を集められるかで変わってくる。

頭を使った作業なら、僕もそれなりに自信があった。

手がかりを多く集めて範囲を絞りながら探せば、そう大変なものじゃないはず。

と、思っていたのだが。

「その辺りは、私たちは詳しくは聞いていないのですよ」

姉さんは首を横に振った。

僕は啞然とする。

「知らない女の子を、情報もなく、どうやって探すの？」

「人探しは、一人より二人のほうが効率がいいでしょう。あなたには、ダイア村のギフトの方と

一緒に、捜索に当たってもらいます。詳しい指示は、すべてその方から受けてください」

ああ、そう言うことか。

確かに、どんな仕事でもするとは言った。

でも、一つの仕事を、僕一人に全て任せてもらえるのだとばかり思っていたのだ。

その言葉を聞いたときの脱力感は、結構大きかった。

「そんな不満そうな顔をしないで。あなたが自分の力で頑張ろうとする意気込みは、よく分かっています。でも、いきなり一人では、何が起こるか分からないし、荷が重いでしょう。少しずつ、自信をつけていってもらいたい」

僕の複雑な表情から、意図を察したらしく、姉さんはそう告げた。

姉さんの言いたいことは分かる。きっと、これは僕の単なる我儘だ。最初から、一人で何でもできるわけがない。まずは功績を積んで、信用されるように努力しないと。

そう言い聞かせて、僕は何とか、やる気を振り絞った。

「.....分かった。じゃあ、まずは隣村に行けばいいんだね」

姉さんは頷いて、

「ダイア村に行くには、途中、小さな森を抜けなくてははいけません。その森の出入り口で、ギフトの方と落ち合う算段になっています。強く厳しく、頼りになる方ですから、ギフトの仕事をよく教えてもらっていらっしやい」

「了解」

僕は頷き返し、部屋を後にした。

ギルバートと二人、村の門をくぐる。

村の外へ足を踏み出し、息を整える。

門の前で、姉さんとソフィアが見送ってくれた。

「きをつけてねー」

「しっかりやるんですよ、ディース！」

「ウケケケ」

ギルバートが笑い返し、手を振っていた。

僕は歩き出す。

一人で前へ進むための、記念すべき第一歩だ。

森の中の出会い

「さて、ここが森の入り口だな」

その森は、村から北西へ数キロほど進んだ場所に広がっていた。

周囲が開けて、見晴らしのよい景色が続いていたため、遠くからでも、もっさりした緑色のドーム状の形が視界に入っていた。

遠くからだと小さく見えたが、いざ目の前にやってくると、なかなかどうして壮大だ。僕は正直、村の総面積より広いと思われるこの森に、圧倒された。

姉さんは「小さな森、だと話していた。なるほど、きっと世界規模で見れば、この森はそんな程度なのだろう。

だが、僕にしてみれば最初の難関となりそうな、大きな障害だった。

この森を抜けないと、隣村には行けない。

とりあえず僕は、一緒に搜索をするという、隣村のギフトの人を捜した。

だが、辺りに人の気配はない。

「何だ、まだ来てないのか……」

つまらなさそうに辺りを見渡していると、予想外のものを発見して、息を詰まらせた。

「あいつ、ジョーカーの手下！」

僕は急いで茂みに隠れる。

特に目的もなく、ふらふらと歩いているようにも見える、大きなランプカードみたいな姿をした、道化の化け物。

幸い、僕には気がついていないらしく、そのまま森の側を素通りして、どこかへ行ってしまった。

安堵のため息。

「本当に、いろんなところをうろつ彷徨っているんだな」

「ジョーカーの気配がしますな。ケケケケ」

ギルバートが笑う。

ファーマリーは、奴らの気配を敏感に察知できるらしい。酔っ払いなりに、異質な存在を感知したのだろう。

あのジョーカーの手下の仲間が、近くにいるのだろうか。

ジョーカーの手下は、その特異な姿を見ればすぐに分かるが、ジョーカーっていうやつは、どんな姿をしているのだろうか？ 色々と本を読んできたが、ジョーカーの外見に関して詳しく書いてあるものは、手の届く場所にはなかった。

あの大きなトランプ野郎を、もっとでかくした奴とか？ 凶悪そうにした奴とか？

それとも、想像もつかない化け物なのだろうか。

昨日倒したジョーカーの手下の言葉が、思い出される。

――ボクがここでやられても、突然消滅したボクを怪しんで、仲間が様子を見に来るだろう。

本当に、そういった理由で、奴の仲間が集まってきているのかもしれない。

「ギルバート、少し森の中に入って、隠れよう。休憩もしたいし」

僕たちは森の中へ足を踏み入れて、ギルドからの使者が来るまで休息をとることにした。

森の中は、当たり前だが木ばかりだ。木の葉の乱舞が、大粒の雨みたいに降り注いでくる。

木の種類は多種多様、葉っぱの形や色、大きさも様々。

今は落葉の季節だ。

養分を木の本体に蓄えるために、そして地面に養分を与えるために、しきりに葉の色を変えて、落としているのだ。

一晩もあれば、地面が見えなくなるほど積もってしまうのだろう。

少しじめじめして、薄暗いけれど、木々の隙間から差し込んでくる光が線のように降り注ぎ、その様子が、なんだか神秘的だった。

それに、落ち葉で見辛いが、ちゃんと道もある。見失わずに進んでいけば、森を抜けることも容易だろう。

「ここなら、外の様子も分かるし、安全だ」

森に入ってすぐの場所に、ちょっとした広場になった空間があった。落ち葉が敷き詰められて、座ると柔らかい。

腰を下ろし、軽く息をつく。

ふと、ギルバートがいなくなっていると気付いた。

「あれ、ギルバート？」

辺りを見渡すが、本当に姿が見えない。

ファーマリーに姿を消す能力なんて、あつたらうか。

それとも、単に飽きて帰ったのか。

探しに行こうかとも思ったが、考え直してやめた。

「まあ、いいや。どうせあいつに頼る気なんてないし」

ギルバートも、まかりなりにもファーマリーだ。敵と戦う術を持っているし、いざという時も一人で何とかできる。

それよりも、下手に一人で動き回って、僕がジョーカーたちに捕まってしまうほうが、よっぽど危険だ。

そう自分に言い聞かせていると、急に目の前の地面が盛り上がった。

「うわあっ！」

落ち葉の山の中から、ちっさいおっさんが飛び出した！

「ギルバート！ ^{びっくり}吃驚するだろ！」

「ウケケケケー！」

飛び出してきたギルバートは、僕を驚かせられたことに満足して、はしゃいでいた。ガキか、このおっさんは。

「ったく、何してんだよ……って」

呆れつつも、びっくりして跳ね上がった心臓を正常に戻そうと落ち着かせていたのだが、鼓動が落ち着く間もなく、またしても心臓が大振動を起こした。

ギルバートが出てきた落ち葉の隙間から、あり得ないものを発見してしまった。

「て、手ー!!」

思わず叫ぶ。

そう、それは人の掌だった。

「うわわわわ……」

僕は反射的に、ものすごい早さで落ち葉を掻き分けた。

手の先には腕があり、肩があり、頭、銅、そして足が。

「え、お、女の子!？」

五体満足で出てきたのは、小柄な少女だった。

年は僕と同じか、少し下かもしれない。長い、くすんだ灰色の髪が、湿気で顔に張り付いている。

やせぎすで、服はボロボロだった。元は真っ白なワンピースだったのだろうが、あちこち綻びて、泥や草の汁で汚れきっている。

「大丈夫!? しっかりして!」

「あ……う……」

僕が大声で呼びかけると、その子は小さな呻き声を上げた。

「よかった、生きてる」

安心して肩の力を抜いた。

女の子の目が、ゆっくりと開かれる。

緑色の、透き通った綺麗な目だった。

「……?」

彼女はむくりと起き上がり、ぼーっとあたりを見渡していた。まるで寝起きのような顔だ。

まさか、寝ていたわけじゃないよね? こんなところで。

たぶん、気を失っていたんだと思うんだけど。

それを前提に、訊ねてみた。

「怪我とか、してない?」

「けが……? ないれす」

「そ、そう。なら、いいんだけど」

僕を見て、女の子は首を傾げていた。

まだぼーっとしているが、言葉は通じる。ちょっと発音の危うい、小さな子供みたいな話し方だが、聞き取るには何の問題もない。

でも、どうしてこんなところに、女の子が倒れていたんだらう？

見たところ、一人のようだ。

この年齢なのに、ファーメリーも連れていない……。

僕はピンときて、再度彼女に尋ねた。

「……君さ、ひょっとして、家出した隣村の子？」

もしそうなら、僕はなんて幸運児なんだらうか。

最短でミッションクリアーだ。それも、自分だけの力で。

ちょっと期待が沸いてきて、わくわくした。

「いえで……？ となり……？」

だが、僕の言葉を何となくオウム返しし、女の子は首をもたげる。

「……わかんないです」

「わ、わかんないって、君、名前は？」

「なまえ……？ わかりません」

自分の名前も分からないなんて。

嫌な予感がした。

「……まさか、記憶がない、とか？」

「きおく、ないでしか？」

「いや、こっちが聞いているんだけどね？」

僕の幸運は一気に坂を下り、麓の底なし沼にでも落ちた感覚だった。

気を失ったショックだろうか。

それとも、気を失う原因となった、何かのせいだろうか。

ともかく、彼女の記憶は失われているらしい。

これでは、この子が誰なのか確認できない。

「うわー、まずいなー。どうしたらいいんだろう、これは……」

僕は慌てふためく。こんな時は、どんな対処をすればいいんだ？

村に戻るか。戻って医者に見せるべきか。姉さんに相談するべきか。

それとも、一刻も早く自分の家へ返してあげるべきか。

「……」

うんうん唸っている僕の横で、女の子は無言で、自分自身の掌を見つめていた。

僕が見つけたのとは反対の手。その中に、堅く握りしめられていた。

白い小さな、四角いものが。

「なにそれ、プレート？」

それに気付いた僕も、掌を覗き込む。

石で作った、薄くて頑丈なプレートだった。表面には、文字が刻まれている。

僕はその文字を見て、驚いて声を上げた。

「クラブ村、デース……って、これ!？」

プレートにはなぜか、僕の住所と名前が彫り込まれていた。

こんなもの、僕は作った覚えがないし、もちろん見たこともない。

誰が僕の個人情報を？ それに、どうしてこの子がこんなものを持っているんだ？ 誰が知っていたって言うんだ？

なんだか妙に胸騒ぎがした。

「なんか、思い出したです」

プレートをじっと見つめていた女の子が、ゆっくり口を開く。

僕は反射的に彼女を凝視した。

「な、何を!？」

「これに書いてある人に会いにいけて、いわれますた」

「誰に!？」

「だれ……？ わからないです」

「ああー、肝心なところが……！」

思わず頭を抱えた。

そこが一番重要なのに。

でも、この子が僕を捜している最中に、記憶を失ってしまったことは確かなようだ。

「けど、僕の名前を知っていて、僕に会いに行くように言われていたんだとしたら……」

僕はまじまじと、女の子を見た。

僕と会う約束、というか、使命を帯びている人間なんて、今のところ一人しか思いつかない。

「まさか、あんた、隣村のギフトの人？」

だが、その説は、どうにも納得しがたかった。

別に子供がギフトだって、全然構いやしないわけだけれど、何というか、想像していたイメージと全く違う。

姉さんだって、強くて厳しい人だと言っていた。そんな印象からは、目の前の子は、かけ離れている。

記憶をなくして、そういった雰囲気全部失われてしまっただけだろうか。本当はとっても、すごい奴なのか？

だが、ファミリーを連れていないのが引っかかる。はぐれた可能性もあるけれど。

プレートだって、たまたま拾って、何気なくその名前の所在を探していただけってことも考えられる。

結局、何も分からずじまいだ。

「いや何にしても、記憶喪失なんて、どうすりゃいいんだ。やっぱり、家に帰って姉さんに相談か……」

またしても、僕はうんうん唸る。

そんな僕を無視して、彼女は一人で森の出口へと歩きだした。

僕は慌てて呼び止める。

「ちょっと、どこ行くの!？」

「やること、みつけます。だから、歩くです」

「やることって？」

「ディースたんに会うのです」

「ディースって……。あ、あのさ！」

僕は必死で彼女を制止した。

そう言えば、混乱していて、この子に何も話していなかった。

「僕が、ディースなんだけど」

改めて名乗ると、女の子はこちらへ向き直り、僕とプレートを交互に見た。

「……これ？」

彼女はプレートを指さす。

僕は何度も何度も頷いた。

「そうそう、クラブ村のディース。僕のこと！」

「ディースたん」

プレートを見つめ、彼女は呟く。

「ディースたん……」

そして僕を見て、また呟く。

僕は力強く、再度頷いて見せた。

そして、ようやくプレートの名前と、僕の名前が同じであるという事実を、理解したらしい。

彼女は表情に花を咲かせ、嬉しそうに僕に飛びついてきた。

「ディースたんんん!!」

「うわっ、ちょ、ちょっと！」

突然抱きつかれ、僕は目を白黒させた。

女の子に抱きつかれるなんて初めてだし、それもいきなりだし、どうしていいのか分からない。

「やっと会えます、ディースたんに会えます！」

やたらと喜んでいる。もしや記憶が戻ったのだろうか？

「ぼ、僕に会えたのが、そんなに嬉しいの？」

恐る恐る尋ねると、彼女はふと我に返って、首を傾けた。

「……？ さあ」

「さあ、って……」

なんだか少し、切なさを感じた。ただの勢いか。

「ところで、僕を捜していたって、どうして？」

「……わかりません」

「やっぱ、分かんないか……」

記憶喪失は健在だ。

僕は彼女を引き剥がし、落ち着かせる。

とにかく、彼女が誰なのかを、分かる人に聞いて確かめなくちゃいけない。

僕の託された仕事に、関係しているのか、いないのかを。

任務に取りかかるのは、その後だ。

「……よし、とりあえず森を抜けよう。それで、隣村に行って聞こう」

「戻るん違うんかい。ケケケ」

ギルバートが茶化すように笑う。

確かに、姉さんに聞きに戻るのが一番確実だ。

でも。

「戻らない！ こんなハプニングで躓いているようじゃ、いつまでたってもギフトの仕事なんて任せてもらえないし、姉さんにも、一人前だって認めてもらえないから」

迷いもしたが、僕にだって意地ってもんがある。

一人の力で困難を乗り越えて行かなきゃ、成長できない。

こんなことで、姉さんの手を煩わせるまでもない。

「よし、じゃあ行こう、一緒に」

僕は女の子に手を差し出した。彼女はしばらく目を丸くしていたが、やがて目を輝かせて、

「いっしょに……。あい！」

頷き、嬉しそうに僕の手を握り返した。

昨日握っていた、姉さんの手と比べてしまう。

姉さんの暖かくて、ふっくらした手とは違って、この子の手は、ちっちゃくて骨ばっていて、冷たかった。

少女は記憶をなくしたとはいえ、すべてのでき事を忘れてはいたわけではなかった。

名前とか、自分のことは全く分からないみたいだったが、ふつうに会話するには支障はない。

たとえば、地面から生えている、緑頭の背高のっぽが木であることは知っているし、足下の小さな赤い絨毯が、花畑だということも知っていた。

それに寄ってくる、白い小さなヒラヒラ飛んでいるものが蝶という生き物だとも、分かるようだ。

ただ、蝶が食べるものではない、ということは知らなかったらしく、ふん捕まえて口に入れようとしたのは、慌てて制止したが。

というか、この子は僕が目を離すと、何でも口に入れようとする。落ち葉やら木の実やらキノコやら。危ないったらない。

どうやら、お腹が空いているらしかった。僕は用意してきた非常食料を分けてあげた。包み紙ごと食べようとしたので、食べ方を教えてあげると、美味しそうに中身を頬張っていた。

「君さ、いつから記憶がないの？ いつからこの森にいたの」

「……？」

何気なく訪ねてみるが、相変わらず首を傾げている。

「それも分かんないか。君は……って、やっぱり名前がないと、不便だなあ」

「なまえ……。ないです」

女の子は、しゅんと落ち込んだ。

ほかの記憶は、覚えていなくても特に何も感じない様子だったが、なぜか名前だけは、分からないことに罪悪感でも持っている様子だった。

名前に何か、深い思い入れでもあったのだろうか。

「なら、呼び名だけでも、つけていいかな？」

僕がそう提案すると、彼女はぱっと顔を上げて、目を輝かせた。

「おなまえ、くれるでしか」

「いや、あげるなんて、そんな大それたもんじゃないけど。あだ名というか、呼び名みたいなものをさ。君が名前を思い出すまで、それで呼ばせてもらえればいいだけだし」

「あい」

こっくりと頷いた。そして、期待に満ち溢れた表情で、僕をじっと見つめている。

待っているのだと気付いた。僕が名前を付けるのを。

まいった。

言ってみたものの、あだ名なんて、急に思いつかない。

その辺にいる動物とかだったら、特徴のあるものの名前とか簡単につけられるけれど。黒かったらクロとか、小さかったチビとか。

あくまで人間だし、女の子だし、変な呼び方は嫌だろうしなあ。

悩む。彼女の視線がとてもプレッシャーになる。だんだん頭がパニックになってきた。

「えっと、じゃあ、その、`コール、`でいいかな？」

「コール？どうしてコール？」

「どうしてと言われても。いや、その、大した理由はないんだけど.....」

言ってみたものの、これは結構気恥ずかしかった。

できれば名前の由来は言いたくなかったが、彼女はそれを許してくれそうになかった。ものすごい大きな目を開いて、無言で問い詰めてくる。

「……コールって、僕が自分のファーマリーにつけようと思っていた名前なんだ」

観念して説明した。

女々しいと思われるかもしれないが、今までずうっとファーマリーを待ち続けていたくらいだ。そんな僕が、自分のファーマリーの名前を、用意していないわけがなかった。

「僕のところには、ファーマリーが来なくてさ。結局、使わずじまいになっちゃったから。少しの間でいいから、よかったら使ってやってよ」

「コール、コール……。コール！」

彼女は、何度も何度もその名前を呼んで、自分の頭に刻みつけているようだった。その表情はものすごく嬉しそうで、こちらとしても、なんだか嬉しくなってくる。

もし、僕のところにファーマリーが来ていたとして、その名前をつけてあげたら、こんな風に喜んでくれたらどうか。

目の前の少女と、空想の中のファーマリーを重ねて、僕は少しだけ、幸せな気分浸っていた。

しかし、そんな幸せも、束の間のでき事に過ぎなかった。

◆ ◆ ◆

「コール、コール、わたしっはコール♪」

「……」

ようやく彼女の呼び名をコールと定め、再び森の向こう側を目指して歩き始めたわけだが。

彼女は、楽しそうにスキップしながら、ずっと歌い続けている。

自分で作詞作曲したのだろうその歌を、さも嬉しそうに、大声で歌いながら僕の横をついてくる。

が、正直言って、一緒に歩いているのが恥ずかしいです。

自分が付けた名前だから、尚更かもしれない。

今は人っ子一人いない森の中だから、まだ我慢できるとしても、森を抜けて人通りのある街道に出てまで、この調子だったらどうしよう。

目立つのは苦手だ。人の好奇の目にさらされるのも、奇妙なもの見るような視線を浴びるのも、きっと、僕には耐えられないだろう。

あまり騒ぎすぎて、ジョーカーに見つかっても厄介だし。

今のうちに、やめさせなければ。

「……あ、あのさ、コール」

僕は足を止め、恐る恐る名前を呼んでみる。

「……！」

するとコールも身体をぴたっと止め、驚いた表情で、こちらに首だけ向けた。

直後、満面の笑みがコールの顔に咲いた。

「あい！」

そして、元気いっぱいに戻事した。

僕は吐き出しかけていた言葉を完全に忘れて、怯んだ。

何も言えずに突っ立っていると、コールは僕の目の前に人差し指を突き立ててきた。

「もいっかい」

「え？」

「もいっかい、お名前！」

「こ、コール？」

「あいっ！ もいっかい！」

「……コール」

「あいっ！」

どうやら、名前を呼んでもらえたことが、すごく嬉しかったらしい。

僕は指図されるがままに名前を呼んでいた。その度に、コールの元気よい声が返ってくる。

「コール……」

「あいっ！」

僕の声が小さくなるのと反比例して、コールの声はだんだんかくなり、まるで小さな子供の悲鳴のようにも聞こえた。耳が痛い。

というか、僕はいったい何をやっているんだ？

「……コール」

「声が小さいです、もいっかい！」

「もう、勘弁してください……」

僕は頭を下げた。

完全にコールのペースに飲み込まれた僕の敗北だ。

コールは不満そうな顔をしていたが、ようやく諦めてくれたらしく、大人しくなった。

なのでささず、当初言うべきだった注意をする。

「頼むからさ、もう少し静かにしてよ。森の中は物騒だし、どこにジョーカーとかがいるか、分

かんないんだから……」

僕の言い分が不服だったらしく、彼女は口の中に空気を詰めて、頬を膨らませた。

「そんなに膨れなくても……。僕が悪いこと、してるみたいじゃないか」

とはいえ、また勢いで、やっぱり歌っていいよ、なんて甘やかしたことは言わない。

僕は自分の意志を断固貫き通した。

「とにかく、村に着くまで、あんまり騒がないでよ。分かった？」

「……」

コールは、「はい」とも「いいえ」ともいわなかった。

僕が無視して歩きだすと、しゅしゅ後を追いかけて、ついてきた。

だが、しばらくすると、背後からあの歌声が。

「コール、コール、わたしっはコール♪」

「分かってない、絶対に分かってない……」

コールの^{てごわ}手強さに、僕は完敗した。

追われる旅人

諦めて、歌いたいだけ歌わせながら、森の中の道を歩いてゆく。

今は、どの辺りだろう？

もう、森の中間地点くらいまでは、辿り着いたと思っているんだけど。

森は静かだった。少し前まで騒いでいた鳥のさえずりも聞こえないし、いつの間にか風も止んでいた。

コールの声さえなければ、怖いくらいの静寂に襲われていたかもしれない。

そんな中。

ふと、遠くで物音がした。

「ん？ 何だ？」

風が木々を揺らし、葉を擦る音とは、また違う。

何かのすごい勢いで、地面を駆っている。そんな音だ。

「コール、静かに！ 隠れるんだ！」

僕は本能のままにコールの手を引き、深い茂みへ隠れた。コールも驚いて歌うのをやめ、ギルバートは僕の後頭部にしがみついた。

身を隠しながら、そっと音のした方角を覗き見る。

木々と木々の間を抜けながら、誰かが走ってくる。

姿が見えた。

黒い服で身を固めた、男だろうか。

若そうだ。背はすらりと高いけど、きっと年は僕と同じか、少し上くらい。

男はしきりに後ろを気にしながら、走っていた。

それは、後ろから彼を追うものがあるという証拠でもあった。

彼の走ってきた道をたどるように、もう一つの陰が姿を現す。

ものすごい速さ、ものすごい勢い。

駆けると言うより突進してきたのは、赤い服に身を包んだ女だった。

長い黒髪を振り乱しながら、長剣を振り回して、黒服の男を追いかけている。

「逃げても無駄だ！ 止まれ！」

女が怒鳴った。低いどすの利いた、おおよそ女とは思えない声だった。

その威圧感は並大抵のものではない。遠目に見ているだけなのに、背筋が凍りそうだった。

黒い服の男も、ただ逃げているわけではなかった。

時折、振り返っては、両手に持ったナイフみたいな投擲武器を投げて、応戦している。女は飛んできた武器を剣で弾いたり、避けたりして身を守る。

あの化け物じみた女もすごいが、それと対等に戦っている男もすごい。

しかし、あの二人は何だって、こんな森の中で戦っているのだろうか。

こういう場面に遭遇したとき、人は自然とどちらが善で、どちらが悪なのかと考えてしまうという。

僕も例外ではなかった。

二人の戦いを陰ながらに見つめ、無意識にずっと考えていた。

普通に考えてみれば、追っているほうが善で、逃げているほうが悪である気がする。

だが、僕にはあの黒い服の男が、そんな悪人には見えなかった。

むしろ逆に、赤い服の女が、なにやら恐ろしい邪気を放っている感じがした。とにかく、迫力があって、怖い。

「くっ……」

黒服の男が追い付かれ、立場が悪くなっていた。

どうしよう、助けるべきか。

迷う。

こんなところで、見知らぬ^{いさか}諍いに巻き込まれるのは賢明とはいえない。今は僕一人じゃなく、コールだっているんだし、危険な目に晒しては駄目だ。

でも、どうしてだろう。

彼を助けたいと、強く思っている自分に気が付いた。

ふと、男と目が合った。

その瞬間、僕の身体は動きだしていた。

僕は側にあった木によじ登る。

その木には、丈夫な蔓が巻き付いていた。

それを引き剥がすと、木に結びつけた長いロープみたいになった。

男は僕の存在に気付いていた。女の攻撃を^{かわ}躲しつつ、僕にも注意を向けてくる。

急に、男は強張った様子で足を止めた。すぐ先は崖になっていて、一步でも後ずされれば落ちてしまう。

その情勢を好機と取り、女は渾身の一撃を繰り出した。

だが、それが僕の狙いだった。

「伏せろ！」

僕は叫んだ。

直後、男はその通りに身体を屈め、女は驚いて動きを止める。

その女の背中めがけて、ロープを掴んだ僕は、一気に飛んだ。

「やああっ！」

足を思いっきり延ばし、女の背中を蹴りつける！

「なっ！」

不意をつかれた女は、そのまま前のめりに吹き飛び、男の上を飛び越えて、崖下へと落ちていった。

「やった！ うわっ！」

喜んだのも束の間、蔓が蹴りを入れた衝撃と僕の重さで切れ、僕は男の目の前に落ちた。

「いてて……」

「ディースたん！」

コールとギルバートが慌てて駆けてくる。

「痛くないですか？ 痛くないですか？」

「うん、大丈夫だよ。痛くない」

ちょっと、やせ我慢だった。

心配そうな顔を覗き込ませてくるコールを宥め、僕は黒い男に目を向けた。

目の前でよく見ると、男とは思えないくらい綺麗な顔だった。色も白くて、茶色い髪も、瞳にも美しい光沢が見て取れる。

「あ、あの……」

いざ、突っ込んできたものの、この後はどうするか全く考えていなかったの、困った。

勢いで助けてみたものの、こいつが僕たちに危害を加えない確証なんて、ないのに。

でも、それは僕の取り越し苦労だったみたいだ。

男はしばらく啞然とした顔をしていたが、すぐに温和な笑みを浮かべた。

「君のお陰で助かったよ、ありがとう」

高くも低くもない、中性的な声が、耳を心地よく撫でる。

「え、あ、いや。ははは……」

僕は、笑い返すしかなかった。

なんだか、無性に照れる。

人に、こんな風に感謝されるなんて。人のために、こんなに一生懸命になるなんて、初めてだ。

とても新鮮で、達成感に溢れていて、気持ちが高揚した。

さっきの女が這い上がってくる可能性を憂慮して、僕たちは男の指示で歩き始めた。

歩きながら、色々と話をした。

「あの、さ。ところで、どうして追いかけていたの？ あいつは、いったい何者だったのかな？」

気になるところを訊ねてみる。彼は少し躊躇^{ためら}っていた様子だったが、意を決したように話してくれた。

「ジョーカーだよ。それも、とびきりタチの悪い」

僕は思わず足を止めた。身体が硬直し、体中から汗が噴き出す。

あれが、ジョーカー。

確かに、恐ろしいほどの威圧感があった。背筋が凍るほどの殺気も感じた。

そんな相手に突っ込んで行って、よく無事だったな、僕。

「て、手下とは、また随分、違うんだね……」

動揺をなるべく隠そうと思って、話題を逸らしてみようとしたが、あまりうまくいった気がしない。

案の定、僕がものすごくビビっていることをすぐに見破り、彼は小さく笑った。

「ジョーカーを見るのは、初めてかい？」

「じょ、ジョーカーの手下なら、戦ったことはあるけど……」

バカにされた、という感じではなかった。僕が怖じ気付いているのを見て、それをからかおうとしている風にも見えない。

この男の目は暖かで、器の大きさを痛感させられる。

僕みたいに、些細なことで悩んだり、動揺したりしないんだろうな。きっと。

そう思うと、少し気後れする。

「ジョーカーも、元々は手下と同じような姿をしているんだよ。でも、奴らは人間に擬態する能力を持っているんだ」

「そうなの!?!」

僕は驚いた。

確かに、さっきの女は、どこからどう見ても人間だった。

ジョーカーは、人間に化けることができる。

つまり、目の前に人がいたとしても、ジョーカーなのか人間なのか、見分けるのが困難だということだ。

そんな奴と気付かずに出くわしたら、僕はきっと、寝首をかかれてすぐにやられてしまうだろう。

「でも、いくら知らなかったとはいえ、君はジョーカーに^{かかん}果敢に挑んで、僕を助けてくれた。その勇気は素晴らしい。とても感謝しているよ」

「い、いやあ、僕なんて、そんな……」

なんだろう、この人に誉められると、めちゃくちゃ嬉しい。

いくらピンチに陥っていたとはいえ、この人はジョーカーとタイマンを張っていたくらいだ。きっと、とても強い人だ。

そんな人に感謝されて、いい気分にならない奴なんていないだろう。たとえお世辞であっても。

森の奥へと入り込み、暫く休憩をしようと、手ごろな場所に腰を下ろした。

「自己紹介が、まだだったね。僕はジーン。ジョーカーやその手下を退治する修行をしながら、旅をしているものだ」

黒服の男ージーンはそう名乗り、僕たちに向き直って丁寧に頭を下げた。すごく礼儀正しい。

服装だって、黒づくめだけどお洒落なデザインで、首には赤い宝石がついたチョーカーをつけている。

どっかの国の王子様か？

とってしまうような様相だ。

僕も、慌てて名乗った。

「僕はディース。この森の向こうの、クラブ村でギフトの仕事をしている。まだ見習いだけど……」

「そうか、ディース君か」

ジーンは微笑んだ。

「んで、こっちが……」

「コールちゃんだよね」

「え、何で知ってんの？」

「さっきから歌声が聞こえていたからね。「私はコール」って。可愛い歌だなーと思って、聞いていたんだ」

ジーンは、にこにこ笑う。

しっかり聞かれてました。

森の中なら大丈夫かと思っていたのに。恥ずかしい。

相手がこの人だと思うと、余計に恥ずかしい。

穴があったら入りたい。そんな気分だ。

僕の気持ちなんて露知らず、コールは僕に貼り付いて、顔を半分隠している。

ジーンを警戒している様子だった。コールにとっては、ちょっと怖そうな人、に見えるのかもしれない。

もうこの話題は忘れようと、僕は話を切り替えた。

「あの、ところで、ジョーカーを倒す修行って……？」

「ああ、珍しいかもしれないけれど、僕にはファーマリーがいないんだよ」

僕は「えっ」と声を上げた。

確かに、彼はファーマリーを連れていない。

自分の力で、ジョーカーと戦っていた。

「ふぁ、ファーマリーがいないって、ひょっとして来なかったとか？」

「いいや、来たよ、五歳の時に。でも、色々あってね、失ってしまった」

ジーンは表情に影を落とす。

ジーンの心境が、僕にはすごくよく分かる気がした。

やっぱり、辛いよ。ファーマリーがいないと。

でも、手に入るべきものを手に入れずに終わると、手に入れたものを失うこと。

どちらの方が辛いんだろう。

「子供の間にファーマリーを失えば、大人になるまでジョーカーの脅威に怯えて生きていくしかない。そう言われていた。だが、自分でジョーカーと戦える術があれば、子供であっても外で生

きていける。ただ隠れながら、ジョーカーたちから逃げながら生きながらえて、何もせずに大人になるなんて嫌だからね。僕は自分のファームリーを失ったときから、自分の力で道を切り開いていく、そんな生き方を選んだんだよ」

「ぼ、ぼ、僕と一緒に！」

僕は目を輝かせた。

「僕もそうなんだよ、ファームリーがいなくても、一人で生きていけるようにと思って、今もこうしてギフトの仕事をしているんだ」

「君も？ でも、君にはファームリーがいるじゃないか」

ジーンが不思議そうに、横に視線を流す。彼が言っているファームリーとは、そこでフヨフヨと漂いながら酒を飲んでいる、ちっさいおっさんのことだ。

「えーと、こいつは、僕の父さんのファームリーなんだ」

僕はジーンに、詳しい事情を話した。

ギルバートのこと、こいつが来てから今までのこと、真実を知って家を飛び出し、ジョーカーの手下に襲われたこと、そして、今請け負っているギフトの仕事のこと。

話を聞くうちに、ジーンは目を大きく開く。そして、少し切なげな表情を見せた。

僕も、話していくうちに、だんだん悲観さがこみ上げてきて、何度か俯いた。

「――だから僕は、自分のファームリーを一度も見ることがないし、これからも見ることはない。それでも、強く生きて、ファームリーの分まで立派な大人になろうって、決めたんだ」

「……辛かっただろう？ そんな事実を聞かされたとき」

「それは、まあ……」

色々、考えた。絶望してみたり、投げやりになってみたり、諦めてみたり。

「でも、真実を知ったらさ、僕もいつまでも守られてるだけなんて嫌だなんて思った。だから、

ギフトの仕事を始めてみたんだ。……けどさ、ハプニングばかりでなんだか良く分からなくなっちゃってさ。本当に駄目なんだよ、僕って」

情けなく、笑ってみせる。

「だから、ジーンみたいな人には、すごく憧れる。ジーンに会えてよかった。僕もいつか、ジーンみたいに自立して、一人で何でもできる人間になりたいな」

「君と僕は、境遇もどことなく似ているし、同じ考えを持っているみたいだね。僕も、ディース君に会えてよかったよ」

「ディースでいいよ。僕も……既に呼んでいるけれど、ジーンでいいよね？」

「もちろんさ」

二人で、笑い合った。

再襲来と別れ

「そう言えば、コールちゃんは？ 彼女も、ファーマリーを連れていないようだけど」

ジーンがふと気付いて、尋ねる。

視線を向けると、コールは目を閉じて、こっくりこっくりしていた。僕たちが話に夢中になっている間に、座り込んで眠ってしまったようだ。隣ではギルバートも、赤い顔をして眠りこけている。

「えーと、コールは……」

僕は彼女と出会った経緯を、掻い摘んで話した。といっても、僕にも分からないことだらけだから、詳しくは説明できないが。

「記憶喪失とは、気の毒に」

ジーンは、コールに同情の目を向ける。僕も途方に暮れて、コールを見下ろした。

「僕はさ、この子はダイア村で行方不明になっている女の子じゃないかなーと思うんだ」

僕の名前の書かれたプレートを持っていた件は、確かに気になる。コールがなぜ、僕を捜していたのかも。

でもそれは、コールの記憶が戻れば、あるいはコールを知っている人に出会えば、分かることじゃないかと思う。

だから、あまり深く考えなかった。

「ファーマリーと喧嘩して、家出をしたという子だね」

「うん。覚えていないだろうから、聞けないんだけど、どうしてファーマリーと喧嘩なんてしたんだろうね」

僕はコールを、じっと見つめた。

「僕、自分のファーマリーと会ったこともないから、分からないんだよ。何で、大事な相棒な

のに、世界で一人だけの大切な存在なのに、酷い扱いをするんだらうって」

ジーンは眉を^{ひそ}顰める。少し、悲痛な表情だった。

「人には、人それぞれの事情がある。君は、ファーマリーと共にいられない日々に寂しさを感じているのだらう。でも逆に、彼女はファーマリーと共にいることに、^{わずら}煩わしさを感じてしまったのかもしれない」

「そういうものかな。……ジーンも、ファーマリーと一緒にいた時に、そんな風に思ったことがある？」

「そうだね。ないといえば、嘘になる」

ジーンは^{あいしゅう}哀愁を漂わせ、目を伏せた。否定をしないところから察するに、きっとあるんだらう。

「僕だったら、絶対に喧嘩なんてしないのに。もっとファーマリーを大事にして、幸せにしてあげるのに」

「……そうだね、君のようなパートナーがいれば、ファーマリーも幸せになれたらうね」

ジーンは寂しそうに笑った。

どうしてそんなに、寂しそうなのか。

聞きたかったけれど、聞けなかった。

ひょっとしたら、ジーンも自分のファーマリーを失った日のことを、思い出していたのかもしれない。

「でもね、ディース。彼女がどんな素性や過去を抱えているにしても、今はそれを失ってしまっている。そんな時に会った、助けてくれた、君だけが全てなんじゃないだらうか。きっと彼女は、君の存在を必要としている。だから、彼女がいくら、君には理解できない考えを持っていたとしても、それを責めずに、守ってあげなくちゃ駄目だよ」

僕はジーンとコールを交互に見た。

確かに、その通りだ。

ジーンに言われると、とても説得力がある。

今のコールには、僕しか頼れる人間がないのだから。

きっと、ポーっとしていても、心細いに決まっている。

こんな風に、コールの考えを否定して、悪く言っちゃいけないな。

「ありがとう、ジーン。僕、自分のことばかり考えてたみたいだ」

僕のことを必要してくれる子がいる。

だったら、その子のために精一杯頑張ればいいじゃないか。

僕が気持ちを切り替えたのを見て、ジーンは笑った。

そして、意を決したように唐突に言った。

「ディース。その、もしよかったら、この仕事を終えた後、僕と一緒に来ないか？」

「え……」

僕は驚いて、ジーンを見た。

茶色い宝石みたいな瞳は、真剣そのものだった。

「でも、僕なんか……、足手まといだよ、きっと」

「そんなことはない！　僕は君に命を救われた。……本音を言えば、一人旅は少し心細かったんだ。こんな生活をしていると、さっきのようにジョーカーに目を付けられるかもしれないから、人目を避けての移動も多いし。君と一緒になら、少しは旅も楽しくなるんじゃないかと……」

ジーンは、一気にまくし立てた。言葉数が少なく、大人びている印象のあったジーンが、こんなにもじょうぜつ 饒舌に話すなんて、少し驚きだった。

だが、途中でハッと我に返り、ジーンは俯いた。

「すまない、いきなり言われても、迷惑だったね。忘れてくれ、今の話は」

「ジーン、僕……」

僕が自分の気持ちを伝えようとした、その時。

「見つけたぞ、ジィィィーン!!」

激しい怒声が辺りを包む。コールが驚いて飛び起きた。

「なっ!？」

「ちっ、見つかったか！」

ジーンは舌打ちし、両手にナイフを構えた。

直後、頭上から影が落ちてくる！

ギィィィン！

刃物と刃物が強烈にぶつかり合う音。

空から落ちてきたのは、赤い衣装に身を包んだ、夜叉のような女。

ジョーカーだ。

「僕がくい止める、君たちは早く逃げろ！」

ジョーカーの鋭い一刀を、クロスさせた二本のナイフで受け止めたジーン。

しかし、その衝撃で地面に膝を突き、身体を震わせる。

「で、でも、ジーン！」

一人じゃ無理だ。やられてしまう。

しかし、さっきのように僕が助けに入る際は、もうなかった。

「君はコールちゃんを守らないといけない。早く行け！」

僕はその怒号とともに、コールの手を引いて駆けだしていた。

僕にはそうすることしかできないのだ。

ジーンの善意に答えるためにも、コールを安全な場所へ連れていくためにも。

後ろを振り返ることなく、ただまっすぐに。

帰る場所

森を抜けるまで、足を止めることなく走り続けた。

視界が開け、光が身体を包む。

青い空が頭上に広がるのが見えたとき、僕は地面に倒れ込んで転がった。

足場の悪い道を全速力で駆けてきたため、足はガクガクだ。息も絶え絶えで、苦しい。

「コール、大丈夫か？」

僕でさえ、こんな状態なのだから、コールはもっと苦しかったに違いない。

急いでいたため、彼女に気を使ってやれる余裕がなかった。

「ごめん。急ぎすぎた」

「あいい。だ、大丈夫です……」

コールも、僕の隣で倒れ込んでいた。顔を真っ赤にして、汗びっしょりになって、肺を小さく上下させていた。

もう少し休ませてあげたいけど、どうせ休むなら、安全な場所のほうがいい。

「少し休んだら、出発しよう。もうすぐ、ダイア村だから。村に入れば安心だし、きっとコールが誰なのか、はっきり分かるはずだ」

コールはよく分かっていないらしく、首を傾げていた。

「その村が、君の帰る場所だといいね」

僕は笑って言った。

「かえる、ばしょ……」

「そうだよ。コールがダイア村の住民に間違いないなら、そこで引き取ってもらって、僕の仕事

は終わりだ。そこでお別れ」

「おわかれ……？ 嫌です！」

コールは突然起きあがって、僕に飛びついてきた。

「うわっ、な、何だよいきなり……」

「ディースたんとお別れ、嫌です。ずっと、ずっと一緒にいるです！」

コールは震えていた。走って身体を酷使したからではない。

彼女は、目にいっぱい涙を溜めていた。

「そ、そんなこと言われてもさ。家族が待ってるなら、やっぱり帰らなくちゃ」

「うっ、ううっ。コールを、置いていかないでください……」

ついに、コールは泣き出してしまった。

まるで捨てられる寸前の子犬だ。

いや、言葉で意思表示をしてくる分、子犬以上に厄介だ。

困った。

非常に困った。

どうしてコールは、ここまで僕と離れるのを、嫌がるんだろう。

ひとりぼっちで森の中にいたことが、よほど怖かったのだろうか。

そのトラウマで、僕と離れることに恐怖を覚えているのかもしれない。

どうすれば、その気持ちを払拭してあげられるだろう。

村に戻れば、安心して僕の手を離してくれるだろうか？

「別に、二度と会えなくなるわけじゃないさ。隣村なんだし、いつでも会いに来れる」

僕は何とかコールを落ち着かせて、立ち上がった。

「とりあえず出発しよう。ダイヤ村へ、行こう」

僕はコールの手を強く握りしめ、歩き出した。

コールも僕の手を、しっかりと握り返して、ぐずりながらついてきた。

しばらく道なりに歩いていくと、村の入り口らしきものが見えた。

僕たちの側をふよふよと飛んでいたギルバートが、入り口に立っている人物に気付いて近寄っていった。

その人物は僕の姿を見て、驚いたように駆け寄ってきた。

「ディース！ よかった、無事だったんですね」

僕も驚いた。やって来たのは、心配そうな顔をした姉さんだった。

「姉さん！ どうしてここに？」

「待ち合わせ場所にあなたが来ないと、この村のギフトから連絡があって。森で迷っているのではないかと心配していたんですよ」

ああ。と内心、納得した。そう言えば、ギフトの人のことを、すっかり忘れていた。

一時はコールがそうかと疑いもしたが、姉さんに連絡をよこしてきたということは、やっぱりその人は別にいるようだ。

「今その方に、あなたの捜索を頼んでいるところです。入れ違いになったのね」

「そうみたいだね。ごめん。色々あって」

「ソフィア、ディースが見つかったと、伝えてきてください」

姉さんの指示に頷いて、ソフィアは素早く森の中に飛んで行った。

その後ろ姿を見届けた後、早く姉さんにコールのことを報告しようと、話を切り替えた。

「そんなことより、大変なんだよ」

「まあ、それは大変！」

「だから、まだ何も言ってないっての！」

また人の話を聞かない姉さんを落ち着かせ、僕はコールを姉さんの前に押し出した。

「行方不明の女の子って、この子じゃないかな。森の中で倒れててさ。記憶がないから、はっきりしないんだけど」

コールと出会った経緯を簡潔に説明すると、姉さんは表情に同情を浮かべて、コールを見た。

「まあ、記憶が……。それは可哀想に、さぞ心細かったでしょう」

「う……？」

だが、コールはあまりよく分かっていないらしく、首を傾げていた。

「あなたが、ここまで保護してきたのですね。よくやりました」

「いや、僕は別に……」

コールを見つけたのだって偶然だし。

でも、姉さんに誉められたのは初めてかもしれない。

ジーンに感謝されたときの感覚に似ている。

ちょっと恥ずかしくて、でも嬉しかった。

「では、この子が家出をした娘さんか確かめましょう。搜索の依頼人である、娘さんのお母さん

が待っていらっしゃいますから、まずはギフトの事務所へ」

姉さんに先導され、僕たちは村の門をくぐった。

ダイア村

ダイア村は、クラブ村よりも民家が少なく、小規模な集落だった。

その分、仲間内の団結が固いのか、それとも外から来た人間に慎重なのか、人の気配はするけれど、姿が全く見えない。

ふと視線を感じて辺りを見ると、ドアや窓をわずかに開いて、中からこちらをこっそり見ている人たちがいた。目が合うと、慌てた様子で扉を閉める。

何だか、見張られているみたいだ。

「感じの悪い村だな……」

「隣村といっても、私たちの住むクラブ村とは、ものの価値観や考え方が全く違うようです。私も最初は気になって、この村について色々と調べました」

歩きながら、姉さんは声を潜めて淡々と説明した。

「この村は、外界のものを拒絶し、独自の文化を守り抜いてきた村なのです」

「と、言うത്？」

「私たちは、ファーマリーと平等に接し、当たり前のように同じ生活をしますよね？」

「まあ、それが普通じゃないの？」

「ですが、この村では、ファーマリーを神格化させる風習が残っていて、人間よりもファーマリーを高く持ち上げる習慣があるのです」

姉さんは少し複雑な表情だった。

僕はまだ、その説明の真意を測りかねていた。

「人間はファーマリーに力を与えるための道具のようなもので、自分のファーマリーがより強く、素晴らしいものへと成長すれば、その人間も同じように尊敬され、逆にうまく育てられなかった人間は、非難の対象となるのだそうです」

「なんだよ、それ……！」

「もちろん、尊敬される人間なんてごく一部です。それ以外の人たちは迫害を受けるなどして、それでも仕方ないと諦めて、底辺での生活を送っているのです。でも、それは村の中だけの立ち位置であり、他所から来た人間に対しては、自分たちのほうが立場が上だと感じているようです。今は様子を伺っていますが、私たちもいつ目を付けられて、腹いせに襲われたいとも限りません。気をつけて」

ずいぶんと、小心者ばかりが集まった村だ。

僕も小さかった頃は、自分のファームリーがいないって理由だけで、村の同年代の子供たちから仲間外れにされたこともあった。

人間って言うのは、単体だと大したこともないのに、集団で集まると急に強気になるのだ。

確かに、数の多さはそれだけで強さになる。一人と十人なら、十人の方が強いに決まっている。

でも、それだけが強さのすべてだとは、僕は思わない。

この村の連中とは、仲良くなれそうにもないな。

「いい迷惑だな、まったく……」

「……こういう事情を知ってしまったから言えることですが、私たちの探している女の子が、この村を飛び出した理由も、分からなくはないです」

姉さんがちらりとコールをみて言う。

まだはっきりと、コールがその女の子だとは分からないものの、もうほとんど決まりだろうと、姉さんは考えているようだ。

僕も同感である。

「その女の子は、決して非難を受けるような立場の子ではなかったそうです。ギフトの仕事もこなしていたそうですし、ファームリーだって、あんなに立派に育てている」

「じゃあ、どうして？」

「とある仕事の途中で、ファーマリーがミスを犯して、失敗してしまったそうです。それを村の人たちは、ファーマリーを責めることなく、女の子を責めた。ファーマリーをうまく育てられなかった、おまえの責任だと」

「そんな、たった一度の失敗で……？」

僕も無意識に、コールを見ていた。

隣を歩いているコールが、何を考えているのか。

ポケーツとした表情からは察しがない。

でも、ひょっとしたら、戻って来たくなかったんじゃないだろうか。

あんなにも僕と離れるのを嫌がったのも、僕と別れるのが嫌なんじゃなくて、村に戻るのが嫌だと、本能的に感じていたからなのかも知れない。

「……連れて戻らないほうが、良かったのかな」

「でも、これが、私たちの仕事ですから」

「でも、もしこの子が家出した子だとしたら、うまく記憶が戻っても、また出て行っちゃうんじゃないのか？」

理由なく家出をしているわけじゃないんだ。

本当に嫌なら、何度強引に連れ戻したって、無駄じゃないだろうか。

「そうね。でも、お母様も心配していらっしゃる様子でしたし、この村のギフトの責任者は、この村で生まれ育った割には話が分かる方です。きっと、悪いようにはしないと思いますよ」

「だといけど……」

何だか気持ちが煮えきらないまま、僕たちは村で一番大きな建物の前までやって来ていた。

ここが、ダイア村のギフト事務所のようだ。

辺りに人の気配はない。

姉さんは入り口のドアをノックし、少し大きめの声を上げた。

「すみません。エリーナさんはいらっしゃいますか？ 行方不明の娘さんらしき方をお連れしました。確認をしていただきたいのですが」

そう言うと、中から駆けてくる足音がして、扉が開いた。

中からは、病弱そうな女性が一人、出てきた。

長い髪を結っているが、所々に綻びがある。

瞳は少し濁りのある茶色だ。

血相を変えて、慌てている。

この人が、コールの母親なのだろうか？

やせぎすであるところ以外は、あんまり似ていない。

「確認って、どういうことですか？」

エリーナさんは^{いぶか}訝しげに姉さんに尋ねた。

目の下の濃い隈が、ほとんど眠っていない事実を浮き彫りにしている気がした。

娘が心配で、夜も眠れなかったのか。

そう思うと、コールにも帰る場所があるのかなと思えて、少し安心した。

「実は、私たちが見つけた娘さんは、記憶を失っているのです。なので私たちだけでは判別がつかなくて……」

姉さんはコールの背を押し、エリーナさんの前へと押し出した。

「なっ、この子……！」

エリーナさんの表情が歪む。

「間違いないですか？」

しかし、その後の反応は、僕たちが全く予想しないものだった。

「追い出して！ 早く、早くここから追い出して！」

「な、何なんだよ、いったい！」

突然悲鳴のような声を上げ始めるエリーナさん。

僕たちは驚いて、一歩後ずさる。

「落ち着いてください。では、この子はあなたの娘さんではないと？」

「当たり前よ、この子は、こいつは……！」

コールを指さし、彼女は狂ったように叫ぶ。

「ジョーカーよ、ジョーカーが化けているのよおお!!」

同時に、周囲の家々から、窓やドアをぴしゃりと閉める音が聞こえた。

村中から人の気配が消える。みんな、家の奥に閉じこもってしまった。

「なっ……？」

「どういうことですか!？」

「こいつは、何日も前から、この辺りをうろつ彷徨っているの。ファミリーも連れていないし、きっと擬態したジョーカーだと、みんな気味悪がっているわ」

震える手で、コールを指さす。

指されたコールも、その声に怯えたのか、震えていた。

「出て行って！ 娘を見つけられないだけじゃなく、こんな化け物を連れてくるなんて！ だから他所の人間は信用できないのよ、早く、そいつを連れて出ていけ！」

エリーナさんはコールに石を投げつけた。

僕はコールを庇い、それを額に受ける。

痛みが走った。ジンジンと広がる。

コールにこんな思い、させたくない。

「ディースたん！」

コールの悲痛そうな声。僕の腕にしがみついてくるコールを守るように、抱きしめた。

「ここは一旦、外に出ましょう。ディース、早く！」

姉さんの指示で、僕たちは村の外へと走った。

僕はコールを守りながら、必死で引っ張って、このおかしい村を駆け抜けた。

だが、頭の中で、さっきの言葉が回る。

——ジョーカーよおおお!!

エリーナさんの悲鳴が、離れない。

さっさと忘れてしまいたいのに。

なんて嫌な言葉なんだろう。

悪夢

「ディースたん、ディースたん」

「うん……コール？」

身体を揺り動かされ、僕は目を覚ました。

顔をあげると、僕の顔を覗き込んで、コールが見下ろしている。

「ああ、もう朝か」

僕は目をこすり、上体を起こした。

村から逃げ出してきた僕たちは、再び森の中へ隠れた。陽も暮れかかってきたので、そのまま野宿になったのだった。

辺りを見回す。姉さんとギルバートの姿が見当たらない。

先に起きて、辺りの様子でも伺いに行ったのだろうか？

薄暗くてよく分からないが、もう夜は明けているようだ。僕も早く起きて、準備をしないと。

「さて、と。また家出娘の搜索は、振り出しに戻ったな。コールのことも、結局何も分からなかったし」

これからどうしようかと、のんびり考える。

丸一日使って、何も進展がなかったわけだけれど、僕は特に焦ってはいなかった。どちらかというと頭もすっきりしているし、前向きに考えていれば、きっと何でもうまく行くだろうと、それくらいは考えられるようになっていた。

「……ごめんなたい」

それとは裏腹に、コールは申し訳なさそうに僕に頭を下げてくる。

自分のせいで村を追い出されたと思って、責任を感じているのだろうか。

「あんなこと言われたの、気にしてるの？ 安心しなよ、コールは、ジョーカーの手下なんかじゃないよ。謝る必要なんてないし、ちゃんと記憶が戻るまで、面倒見るからさ」

僕はコールを元気づけようと、笑ってそう言った。

「でも、やっぱり、ごめんなたい」

だが、コールはもう一度謝り、僕を押し倒した。

その骨ばった小さな手は、僕の首を握りしめていた。

「……こ、コール？ 何を……」

この子のどこに、こんな力があつたのだろう。とてつもない握力で、僕の首を絞めにかかる。

いったい、どうしたっていうんだ。

訳が分からず、手も足も出せずにいた。

コールの表情は、いつものようなボケーツとしたものではなく、影の差した、恐ろしい形相へと変わっていた。

「一晩、眠ったら、全部思い出しますた。わたし、わたし……」

そして、恐ろしいことを口にした。

「ジョーカーなんです。人間の姿に擬態して、あなたを捜していたんです」

「そ……な……」

そんな、と言おうとした。何かの間違いだと。

でも、声さえも出せないほど、僕の喉は圧迫されていた。

「あなたがファーマリーのいない子供だと言うことは、ずっと前から分かっていました。あなたが護衛のファーマリーから離れて、一人になる時を待っていたんです。運悪く記憶を失っていま

したが、ようやく思い出すことができました」

コールは不気味に笑った。

「わたしは、あなたのファミリーを殺し、食らい、そして、独りぼっちになったあなたを見つけて、^{さら}攫うつもりだったのです。……ずいぶん時間がかかってしまいました」

「や、やめろ、コール……」

なんとか腹に力を入れ、声を出す。

蚊の鳴き声のような、か細い声しか出なかった。

その声はコールの耳には届いたが、心には届かなかった。

「わたしはコールではありません。わたしに名前なんてない、ただのジョーカーです」

コールは僕を見下ろして、ニヤリと笑った。

身体中が総毛立った。

「さあ、一緒に行きましょう、何も苦しむ必要のない、死の楽園へ！」

「う、うわああああああ!!」

どうやって悲鳴を上げたのか分からない。

だが、自分でも驚くくらいの声を張り上げた瞬間、僕は落ちるように暗闇の中に沈んでいった。

◆ ◆ ◆

「ディース、ディース！」

名前を呼ばれて、僕はハッと息を吸い込んだ。

「はっ、はあ、はあ……」

地面に横たわる僕は汗だくになって、息を切らしていた。

僕の顔を覗き込んで、心配そうな表情を見せているのは、姉さんだ。

「ずいぶん、^{うな}魔されていましたよ。大丈夫ですか？」

その時、僕は自分が今まで眠っていたのだと気付いた。

さっきのあれは、夢だったのか。

だが、夢だとしても。

「ぼっ、僕は、なんて夢を……」

夢でも何でも、絶対に見ちゃいけないものだった。

コールが、人間に化けたジョーカーだなんて。

昨日のあの出来事が、僕にこんな夢を見せたんだ。

こんなに簡単に影響を受けてしまうなんて。

自分が嫌になりそうだった。

夢から醒めても

夢の中と同じく、僕たちは村を追われた後、森の中で一夜を明かした。

朝食の支度をしながら、姉さんが僕に言う。

「食事が住んだら、すぐに出発しましょう。ソフィアとも早く合流しなくてははいけません。デイス、その、コールさんを起こしてあげてください」

姉さんがその名前を呼ぶときに、少し動揺が見えた。

コールは少し離れた場所で、まだ眠っていた。

起こすのなら、姉さんでも事足りるはずなのだ。

なのにそうしようとしなない。

と言うより、できないのだろう。

理由は、おおよそ明らかだった。

「姉さんも、昨日言われたこと、本気にしてるの？」

僕だって、人のことは言えない。夢にまで見るほどなんだ。

今、ムキになって本気にしていないと強がっても、心のどこかでは、そう思っているのかもしれない。

何だか自分が信じられなかった。

姉さんも僕の言葉に、ばつが悪そうに俯いた。

「.....確かな証拠がない以上、彼女を疑ってかかるのはよくないことです。でも.....」

続かなかった言葉の先には、恐怖が連想できる。

姉さんとて、怖いのだ。

ただでさえ、今はソフィアもいないわけだし、身を守る術が何もない。

何かが起こったときに、頼れるものがない状態なのだから。

「でも、ギルバートがいるじゃないか。こいつはずっとコールの側にいたけど、特に警戒する様子もなかった」

ファーマリーは、ジョーカーたちの気配に敏感で、人間には発見できないような殺気などの気配を、察知できる。

姉さんもそれを常識並みに知っているはずだ。

「それは、そうですが。彼女は記憶を失っています。したがって、今の彼女はあなたに危害を加える存在ではない。だからギルバートも、動かなかったのかもしれませんが」

「そうなのか？ ギルバート」

「ウケケケ」

ギルバートは、朝っぱらから酒浸りだ。持ってきた酒瓶も、ほとんど空になっている。

もしくは、酒の飲み過ぎでジョーカーを関知する勘もすっかり鈍ってしまっているのかもしれない。

僕は少し呆れた。こいつに妖精なんて称号はもったいなさすぎる。

酔う精で充分だ、酔う精で。

「だけどさ、ジョーカーだって子供を攫うのが目的なら、こんな頼りなさそうな女の子より、子供がついていきそうな大人に擬態したほうが、効率がいいんじゃないかな？」

気を取り直して、僕は姉さんに言った。

しかし姉さんは厳しい表情を緩めず、僕の目を見つめた。

「ディース、なぜジョーカーが人間の子供を狙うのか、分かりますか？」

突然尋ねられ、僕は答えられず、硬直する。

「一つは、彼らの好物だから。そしてもう一つは、さらった子供たちの身体を乗っ取って、自分のものにしてしまうためなのです」

「乗っ取るって、どんな風に……？」

「体内に直接寄生するとも言われていますし、強力な催眠術のようなものをかけて、遠隔操作するとも言われています」

ジーンも、同じような事を言っていたかと、思い出した。

「具体的な方法は分かりませんが、ジョーカーは、誰にでも変身できる力を持っている、というわけではないのです」

ジョーカーは人間の姿に擬態する。

それを僕は、ジョーカーが人間の姿そっくりに変身するのだと、勝手に勘違いしていたようだ。

擬態するとは即ち、人間の子供の身体を乗っ取って、自分のものにしてしまうことだったのだ。

「確かに、子供を攫うためには大人の姿のほうが便利でしょうが、子供に化けていれば、大人だって警戒しないという逆の発想も考えられますしね」

僕のこめかみに、青筋が伝う。

実際、僕はコールの外見を見て、ジョーカーだなんて思いもしなかった。面と向かってコールがジョーカーだと言われるまで、微塵も疑いはしなかった。

夢の中のコールと、姉さんの話すジョーカー像が、一瞬重なった。

「だから、その、記憶を失っているとはいえ、彼女が人間の子供の皮をかぶったジョーカーであるという可能性を、否定することができないのです……」

コールだって、元は人間に違いないだろう。

だが、すでにジョーカーに乗っ取られて、操られているのだとしたら.....。

僕は、気が遠くなりそうだった。

だが。

僕はふと閃いた。

「姉さん。僕、思ったんだけど」

「私も同感です」

「お姉さま、まだ何も言っていませんが？」

僕が突っ込むと、姉さんは顔を赤くして俯いた。

また悪い癖が出たと、反省しているようだ。

「す、すみません。で、何を思ったのですか？」

「ジョーカーに乗っ取られた子供は、もう元には戻れないの？」

姉さんはぼかんとした顔で、僕を見ていた。

「さあ、考えた事ありませんでしたが.....。でも、そんな方法があるのなら、それほどジョーカーを恐れる必要もないと思います」

「そっか。そうだな」

「でも、ジョーカーと言えども、それほど完璧な力を持っているとは限りません。人間であらざるとはいえ、所詮は道化。そこには何かしらのトリックがあるのかもしれないね」

姉さんは少し考え込むようにして言った。

なるほど。

そのタネを見破る方法があれば、ひょっとしたらジョーカーの操り人形に成り下がってしまった子供を、元に戻せるかもしれない。

みんな、ジョーカーを恐れているから、何となく思っているけど、実行に移さない。

でも、必要以上にジョーカーが恐れられすぎているということはないだろうか？

それとも、それも僕の勝手な願望に過ぎないのだろうか。

「……ディース、あなたもしかして、コールさんを助けようとして？」

姉さんは訝しげに尋ねてくる。

僕はちょっとドキッとした。

この閃きの根底には、やっぱりコールが絡んでくる。

でも、あまり考えないようにしていたんだ。

だって、それじゃあ、コールがジョーカーであると根っから肯定しているようなものだから。

動揺を押し殺し、何とか平常心を保った。

「そんなつもりじゃないよ、聞いてみただけ。だって、コールがジョーカーだなんて、決まったわけじゃないんだから」

そして僕は立ち上がった。

「コール、起こしてくるよ」

僕は自分の中にある、コールへの疑いを全て振り払った。

そんなに簡単に、人を疑っちゃダメだ。

姉さんが怯えているからと言って、僕までそうである必要はない。

僕までそんな態度でいたら、コールが傷つく。

コールが何者であれ、今は記憶がないんだ。

彼女が頼れる相手は、僕しかいないんだから。

恐ろしい寝言

コールは大きな葉っぱにくるまって、すよすよと気持ちよさそうに寝息を立てていた。

その顔はとても幸せそうで、とてもじゃないが腹に一物持っているとは、到底思えなかった。

こんな無防備で、無警戒なジョーカーが居るはずがない。

そう、そうに決まっている。コールはジョーカーなんかじゃない。れっきとした人間だ。

「コール、朝だよ……」

僕はコールを起こそうと、彼女の肩に触れようとした。

「――人里では、常に人の姿を維持すること」

すると、コールが呟いた。寝言だった。

僕の手は止まり、金縛りにかかったように動けなくなった。

「――人前では必ず人の子を演じること。決して、自分の正体を、誰にも悟られてはいけない。狩られてしまうから」

こめかみを、汗が伝う。

「クラブ村のディースを探せ。探して、探して、見つけて、そして――」

自分の顔から、血の気が引いていくのが分かった。

人が見る夢は決して幻想や空想ではなく、心の奥底に秘めた強い思いであったり、無意識に思い出している過去の残像であるという。

僕が強烈な言葉を心の奥底で真に受けて、あんな夢を見てしまったように、コールも失われた記憶の断片を、夢の中で思い出していたのかもしれない。

だが、そうだとしたても。

何を言っているんだ、この子は？

理解ができなかった訳ではない。

でも、寝言とはいえ、そんなことを言うなんて、まるで、まるで――。

「……こ、コール……」

たまらず、僕は名前を呼んだ。口の中が乾燥して、喉が張り付いていた。

「うん……？ あ、ディースたん」

コールは目を覚ました。

昨日と変わらず、ポーッとした表情だった。

「おはようございめす」

「お、おはよう」

夢で見たような、変化は見られない。

そのことが、僕をいくらか安堵させてくれた。

「コール、何の夢を見てたんだ？」

「ゆめ……？ 見てたでしか？」

「いや、覚えてないならいいけど」

コールはまだ、記憶を失ったままだ。

だが、その記憶が蘇れば。

僕の夢は、正夢になってしまうのか？

さっきの寝言は、ジョーカーがコールに与えた命令だとでもいうのか。

僕は必死で、彼女を疑うまいと自分を押しえつけていたけれど。

今回ばかりは、もう無理だと思った。

偽りのジョーカー

「姉さん。起こしてきた……」

「しっかりして！ 大丈夫ですか!？」

コールを連れて戻ってくると、血相を変えて慌てる姉さんが目に入った。

「ああ、ディース、大変なんです」

「大変って、何が……？」

困惑して、姉さんの側に歩み寄る。

その向こう側に、誰かが座り込んでいた。木の幹に^{もた}凭れ掛かって、ぐったりしている。

どこで何をやらかしたのか知らないが、身体中もの凄い傷だらけで、満身創痕といった感じだ。
。

それだけならば、その身を心配したり介抱するのに、なんの抵抗もない。

だが、その人物が身に^{まと}纏っている赤い服、肩を覆いながら乱れて流れる黒い髪が、僕の中にあつた恐怖の記憶を呼び覚ます。

「離れて、姉さん！」

僕は姉さんの肩を引っ掴んで、^ゝそいつ、から遠ざけた。

「どうしたんです？ ディース！」

「こいつ、ジョーカーだ。近付いちゃ駄目だ！」

姉さんは驚きの表情を浮かべる。

そう、こいつはジョーカーだ。

ジーンを追いかけ回していた、あのジョーカーなのだ。

一度は撃退したが、懲りずに再度、ジーンに奇襲を仕掛けてきたのは記憶に新しい。

その後どうなったのか、コールと二人で逃げた僕には分からなかったけれど。

ここまで傷だらけになっているところを見ると、ジーンと激しくやりあったのは間違いないが――。

ジーンは、どうなったのだろう。

心配だが、今は目の前にいる、このジョーカーを何とかしなければ。

ろくに動けなさそうな今なら、僕でも倒せるだろうか？

必死で思考を巡らせていると、奴は僕を見て鼻で笑った。

「誰かと思えば、昨日私を蹴り飛ばして崖に落としてくれた小僧じゃないか。その上、私をジョーカー扱いか。いい度胸だ」

余裕に満ちた台詞。

自分が危険にさらされているとは、微塵も感じていない態度だ。

急に立場が逆転して、僕が気圧されてしまう。

「な、なんだよ、元はと言えばお前が……！」

その物言いにカチンときて、僕はジョーカーに食ってかかった。

だが、すぐに姉さんの怒鳴り声に制止される。

「やめなさい、ディース！ 彼女はミーシャ。私の友人であり、あなたが森の入り口で落ち合うはずだった、ダイア村のギフト責任者です」

「な……？」

一瞬、僕の頭が真っ白になる。

「ミーシャ。この子が話をしていた、私の弟、ディースです」

「ふん、ガキだとは聞いていたが、ここまで礼儀のなっていない奴だとはな」

僕がジョーカーだと思っていた女一ダイア村のギフト、ミーシャは僕の顔を見上げて、
ちょうしょう
嘲笑した。

我に返った僕は、怒りがおさまらずに、一気にまくし立てた。

「お前がギフト？ だったら、だったらどうしてジーンを追いかけ回したり、攻撃を仕掛けたりしたんだ！」

「どうしてもこうしても、それが私の仕事だからだ」

「何でだよ、今回の仕事は、家出した女の子を捜し出すことだろう!？」

「そうだ、とっ捕まえて、村に連れ戻さなければ」

「だから、だったらどうしてジーンを……」

僕の物言いに疑問でも浮かんだらしく、ミーシャは訝しげに眉を^{ひそ}顰めた。

「お前、昨日ジーンと一緒にいたんじゃないのか？」

「いたさ。だから分からない。ジーンは旅人だし、第一、女の子じゃないだろう？」

するとミーシャは、大声で笑い始めた。

「何だよ、何がおかしい！」

「お前、気付いていないのか」

さも苦しそうに、ミーシャは腹を抱える。笑うと傷が痛むらしいが、堪えられず、どうしようもない、といった様子だ。

ひとしきり笑った後、僕の顔を見て、表情を真剣なものにした。

「なら教えてやろう、ジーンは、れっきとした女だ。ダイア村に住んでいた、男勝りな小娘だよ」

「う、嘘だ……！ だって、ジーンはジョーカーを倒す修行をしながら旅をしていて、僕たちのことも助けてくれて……」

「嘘じゃないさ。私は、あいつが赤ん坊の頃から知っている。少なくとも、あいつは男ではないし、数日前まではあの村にいたんだよ」

「お……お前の言葉なんか、信じられるか……」

何とか気力を振り絞って、^{きょせい}虚勢を張る。

だが虚勢なんて、こんな動揺しているときに張って見せたって、何の効果もない。

「なら聞こう。私がジョーカーであると教えたのは、ジーンなんだろう？ なぜ奴は、お前にそんな嘘を教えたのだ」

「そ、それは……」

「答えは明快だろう。捕まりたくなかったからさ。私がギフトであり、その私に自分が追われている。その事実が他の人間に知られたら、理由なんてお構いなしに、そいつらはギフトに加勢するだろう。そう考え、それを恐れたジーンは、お前に嘘をついたのだ」

ミーシャは少し同情めいた、かつ、^{あざけ}嘲りの笑みを浮かべる。

「騙されていたんだよ、お前は」

僕は、^{がくぜん}愕然とした。

僕は、ジーンに信用されていなかったのか？

確かに、僕は自分がギフトの見習いだと名乗ったし、自分の任務についても話をした。

ジーンがその標的だったなんて、全く知らずに。

それで、ジーンが警戒したというのなら、分からなくもない。

でも、ジーンが僕に嘘をついたのは、僕が自分の素性を名乗るよりも、前だった。

最初から、僕はそういう目で見られていたんだろうか。

「まあ、災難だったな。家出娘に振り回されて」

呆れたように、ミーシャは鼻を鳴らす。

分かっていることとはいえ、本当のこととはいえ、こいつに言われると腹が立ってしょうがない。

「でも、お前は、ジーンと戦ったんだろう？」

僕は言い返してやろうと決心した。

僕たちとジーンが別れたとき。こいつが、ジーンに奇襲を仕掛けたときだ。

「ジーンが家出した女の子だっていうなら、何でお前はそんなボロボロになってるんだよ！
ファーマリーも連れていない、ただの女の子に、そんなにコテンパンにされるわけないだろ！」

「……！」

僕の指摘は、かなりの的を射たものだったらしい。

ミーシャは口をつぐ嚙み、憎々しげに僕を睨み上げてきた。

ここまでまんしんそうい満身創痕になったのには、何か理由があったのかもしれない。だが、それを口に出すことは言い訳になってしまう。そう思って、何も言い返さなかったのだろう。

見るからにプライドの高そうな女だ、その反応は、意外と予想通りだった。

追うもの 追われるもの

硬直した空気。止まってしまったかのような、凍えた時間。

たまらず姉さんが何か口に出そうとした。そのとき。

「ルーシー！」

静寂を破壊したその声は、森の奥から飛んできたファーマリーのものだった。

やってきたのはソフィアと、もう一体、切り揃えた真っ直ぐな黒い髪をしたファーマリーだった。

二人は一緒に、大きな鳥籠を運んでいた。

それは、僕が村を出発するときに見た、あの鳥籠。

中には、ファーマリーがちょこんと入っている。

「よかった、無事だったのね。この辺りから、ジョーカーの気配がプンプンしてるから、心配してたの」

「私は大丈夫。でもミーシャが……」

「ミーシャ様！」

鳥籠を地面におろし、黒髪のファーマリーがミーシャに飛び寄った。

彼女はミーシャのファーマリーなのだろう。泣きそうな顔だ。

ミーシャに触れたいのだけど、痛々しい傷を見て触れられずに戸惑っているようだ。

「ご苦労だったな、アルル。お前がいないと、この様だよ」

「申し訳ありません。私が別行動をとっていたばかりに……」

「私が、そうしろと言ったのだ。気にする必要はない」

「……はい」

主に忠実なファーマリーは、ミーシャの言葉を聞いて冷静さを取り戻した。

「ソフィアは、姉さんと離れた後、何をしていたの？」

僕はふと、気になって訊ねた。

「ミーシャたちと連絡を取るために森に入っていたんだけど、行方不明の女の子が、この森の中にいるって分かったから、説得の意味もかねて、その娘のファーマリーを連れてこようって話になったの。それで、クラブ村まで戻っていたのよ」

「まあ、そんなことが。……もっと、早くにそれが分かっていたら」

姉さんは肩を落とす。

事前に連絡が取れていれば、ダイア村に行く必要もなかったし、コールを、あんな辛い目に遭わせなくても良かったかもしれない。

僕だって、あんな悪夢を見ずに済んだのだろうか。

「でも、すっごく手こずっちゃってさ。意地でも行かないって、この子がおねるから、鳥籠ごと連れて来ちゃった」

僕はしゃがみ込んで、鳥籠を見た。

中で膝を抱え、うずくまるファーマリー。

彼女は、ジーンのファーマリーなんだ。

「……あのさ、ジーンのこと、許してやってくれないかな」

僕が声を掛けると、彼女は顔を上げて、大きな瞳を潤ませた。

そしてまた、俯いた。

「あたしが許しても、ジーンは許してくれないわ」

辛そうな表情から、彼女の気持ちが伝わってきた。

きっと、このファーマリーも、ジーンと一緒にいたいのだ。

ジーンがファーマリーから嫌われていなくて、良かった。

「お前たちの住んでた村に行ったけどさ、あんな厳しい村で暮らしてたら、誰だって生活が嫌になるさ。でも、きっとジーンも勢いで出て行っちゃっただけで、本気じゃなかったと思うんだ。強がって、一人で生きていこうって頑張ってるけど、本当はきっと、一人は寂しいんだよ。僕みたいなのに、一緒に行こうなんて言ってきたくらいなんだし」

そう言ってやると、ファーマリーはボロボロと涙をこぼした。泣きながら、鳥籠の柵を掴んで揺らしはじめる。

「あたしがいけないの。あたしが、ちゃんと、本当のこと言わなかったから。叱られるの、怖かったから。ジーンに、全部押し付けた。だから、ジーンは、ジーンは……」

彼女は呪文のように呟いていた。

謝らなくちゃ、謝らなくちゃ。と。

「出して、ここから出して！」

僕は鳥籠の扉を開けてやった。ファーマリーはそこからするりと抜けだし、あっという間に飛んで行ってしまった。

「あ、あたしたちの苦労は……」

あまりにあっさりとして事が運びすぎて、ソフィアは啞然として絶句した。

「ミーシャ様、勝手に行かせて、よろしかったのでしょうか？」

「構わん。どのみち、我々が間に入って仲裁など、できない」

アルルの問いかけに、ミーシャが答える。

「力づくで、どうにもならないんだ。あとは内面に訴えかけて、説得するしかないだろう」

たしかに、その通りだ。

僕も、ジーンと仲直りしてほしかったから、ファーマリーを説得してみたのだから。

成功するとは、思わなかったけど。

ソフィアが恨めしそうに僕を睨んでくる。一晩かけても外に出せなかった頑固なファーマリーを、僕が二言三言で簡単に出してしまったのが、とても悔しかったらしい。

その形相に恐れをなし、僕は無意識に目を逸らした。

その目線の先には、黙って突っ立っているコールの姿が。

ソフィアも、彼女の存在に気付いたらしい。

目を細めて、訝しげな表情を見せた。

「あら？ ディース、その子って、まさか……」

僕はビクツとした。

同時に、まずいと思った。

ソフィアは、微妙な視線をコールに向けている。

恐らく、ファーマリーならでわの鋭い勘で、コールの正体を見破ったのか。

ファーマリーの確固たる証明があれば、今までは曖昧だった姉さんも考えを改めるだろうし、ミーシャたちも黙っていないだろう。

このままでは、コールが狩られる。

「逃げよう、コール！」

僕は荷物とコールの手を掴み、駆けだした。

「ディース、どこへ行くの!？」

姉さんの言葉も無視して、僕は一目散に、森の深い場所へと逃げていった。

贈り物

「ディースたん！ まってください！」

森の中を必死で駆ける。

そんな僕を、ずっと引っ張られてついてきたコールが制止させた。

立ち止まり、後ろを見る。誰かが追いかけてくる気配はない。

でも、きっと今頃、ソフィアの口からコールの正体が語られているだろう。

「どうして、逃げるですか？」

息を切らしながら、コールが訊ねてくる。

彼女はまだ、今の状況がよく分かっていないみたいだ。

僕は少し迷ったが、はっきりと告げることにした。

「君が、ジョーカーだからだよ」

コールは大きく目を見開く。

「あそこにいたら、確実に捕まる。問答無用で、殺されてしまうかもしれない。逃げることしか、できないんだよ」

僕が簡単に説明すると、コールは、ぶんぶんとう首を横に振った。

「……ちがうです。コールは、ジョーカーじゃないです」

僕は少し苛立ちを覚え、怒鳴ってしまった。

「だったら、何なんだ！ ジョーカーじゃないなら、君はいったい、何だっていうんだよ！」

なぜ、ダイア村の周りを彷徨っていたんだ。

なぜ、僕を探していたんだ。

なぜ、ファーマリーを連れていないんだ。

あの寝言は何だったんだ。

頭の中で、疑問が渦を巻く。

全てをコールにぶつけたところで、その回答は返ってこないことくらい、分かっている。

だから余計に、苛立つ。

何も分からないことが、こんなに歯痒いなんて。

「コールは、コールです。ディースさんに、お名前いただきました……」

コールは、僕の声に怯えて、身体を震わせていた。

それでも、必死で言い返してきた。

「……違う。コールは、僕のファーマリーの名前だ。記憶をなくした君に、貸してあげているだけだ。あげるわけにはいかない」

僕は否定し、首を振る。

彼女の顔が、みるみる歪む。

「僕の、大事なファーマリーの名前なんだよ！ 君の仲間に殺された、僕の、大事な……」

「じゃあ、じゃあ、私は誰でしか……？」

「だから、さっきから言ってるだろ。君はジョーカーだ」

「違います！ ジョーカーは怖いんです、恐ろしいです！」

大きな声で、そう叫ばれた。

僕は驚いて、一瞬怯む。

「ディースたん、私のこと怖いですか？ 恐ろしいですか？」

必死で訊いてくる。

僕は彼女を見つめた。

やせぎすで、見^み窄^{すぼ}らしくて、見るからに怪しいけれど。

――怖く、ない。

――恐ろしく、ない。

一度もそう思わなかったと言えば、嘘になる。

でも、彼女は決して、僕を絶望させない。

村の外に出た時に襲ってきた、ジョーカーの手下から滲み出ていた、何もかもが嫌になりそうな感覚は、ないんだ。

「……ごめん、言い過ぎた」

僕は、地面にへたり込んだ。

彼女がジョーカーの仲間ではない。と、まだ胸を張って言うことはできない。

でも、彼女を傷つけないように、心の奥深くにしまっておくだけなら、できる。

いつか、堂々とそう言える時まで。

僕の中には、今までとは違う、固い決意があった。

僕は荷物の中を漁り、一番奥にしまっていた包み紙を取り出す。

中身は、羽ばたく鳥の形をした、髪飾りだ。

—僕は目を閉じ、空想の中の、自分のファミリーに語りかけた。

僕は、君の面影をずっと探して、生きてきた。

でも、君がもういないと知ったとき、歩き出さなきゃと思ったんだ。

そのときはまだ漠然としていて、先のことなんてほとんど考えられなかった。

でも、今は違う。

僕は行こうと思うよ。

一人じゃないから。

隣には、君はいないけれど、彼女がいる。

彼女は、ジョーカーかも知れない。

君を僕から奪った敵の、仲間かも知れない。

でも、彼女は僕を必要としてくれている。

だから、守ろうと思うんだ。

助けようと思うんだ。

ギフトからも、ジョーカーからも。

そんな僕を、君は許してくれるだろうか？

許してくれなくてもいい。

ただ。

僕が君を裏切った訳じゃないこと。

今でもずっと、ずっと大切に思っていることを、分かっていたほしい。

だから、今しばらく、さよならだ。

僕は、思い出にすら登場しない、会うこともできなかったファーマリーに、形ばかりの別れを告げた。

「きれいですー……」

ふと気付いて顔を上げると、コールが僕のすぐ横に座り込んでいた。さっきの剣幕はすっかり忘れてしまったように、瞳を輝かせて髪飾りを見ている。

僕は笑って、その髪飾りをコールの頭につけてあげた。

くすんだ灰色の髪に、不思議な輝きを放つ髪飾りは、よく似合う。

「お詫びに、あげるよ。僕はもう、こんなのにすが縋ってちゃ、駄目なんだ」

僕はまっすぐコールを見て、言った。

「どこまでやれるか分からないけど、僕がコールを守るから。助けるから。僕と、一緒に来てほしい」

「私、コールでいいですか？」

コールは尋ねた。僕は頷いた。

「ディースさんと、一緒にいてもいいですか？」

僕は再度、頷いた。

コールは少し頬を赤く染めて、俯いた。しょんぼりしているようにも見えた。

「コール、ディースさんにもらってばかりです……」

「いいんだ、僕も、たくさんもらった」

前へ進む勇気。

誰かを守りたいと、本気で思える気持ち。

今までのように、ただ家にいるだけじゃ、絶対に見つからないもの。

コールはそれを、たくさん、たくさん教えてくれた。

コールは分からないようで、首を傾げて困った顔をしていた。

再会の真実

僕とコールは、歩きだした。

宛があるわけではないが、今は少しでも遠くへ行くべきだ。

できれば、コールをジョーカーの影から解放する。

そんな方法を、見つけたい。

そう考えながら、とりあえず歩みを進めてゆくと、目の前に人の気配を感じた。

ふと前方を注視すると、木の陰に重なる、誰かの人影が見える。

相手は必死に身を隠しているようだったが、動揺しているのか、うまく気配をコントロールできていない。

「ジーン、か？」

僕は直感的に、その人影に声をかけていた。

この森の中で身を隠そうとしている人間が、他に思いつかなかったのだ。

人影は飛び上がるかのように大きく体を震わせ、素早く首を後ろへ向けた。

「ディース……」

やっぱり、ジーンだった。

僕はジーンに駆け寄る。

ジーンは、自分の身体を抱きしめるようにして、膝を折っていた。黒い服だからよく見えませんが、その布地には血がしみこんで、どす黒さが増している。

よく見れば、首筋や腕なども、傷だらけで白い肌が見る影もない。

「酷い怪我だ！ 大丈夫？」

僕はジーンに触れようとした。傷口をよく見ようと、襟元を掴んでシャツのボタンを外そうとした。

しかし、その手は弾かれた。ジーンは怯えるような表情で、僕から逃れるように身体をよじらせる。

「だ、大丈夫。見た目ほど、酷いものじゃないから」

そして、動揺を見繕^{みつくろ}うように、笑ってみせるのだった。

「身体、見られるのが嫌？」

僕はふと、罪悪感をもって手を引いた。

「そうだよ、女の子だもんね……」

呟くと、ジーンの白い頬が紅潮した。

少し、動揺した。

目の前のジーンと、記憶の中のジーンが重ならない。

昨日のジーンは、強くて自信に溢れた、カッコいい僕の憧れの青年だった。

なのに、今のジーンは、たどたどしくて、小さくなって震えている、ひ弱な女の子だ。

これがきっと、ジーンの本物の姿なのだろう。

「――ミーシャに、会ったんだね」

ジーンは尋ねてきた。彼女の正体を知っているということは、それしか考えられなかったのだろう。

僕は頷いた。

「いろんな人に会ったよ。ダイア村の臆病な人たち、君のお母さん、ミーシャ、それに、ジーン

やコール」

初めて村を出て、多くの人たちに出会った。

どれもこれも新鮮で、初めての出会いばかりだった。

「コールは、行方不明の女の子じゃなかった。君は最初から、それを知っていたんだよね」

その子は、本当はジーンだった訳なんだから。

僕はジーンを見つめた。ジーンは俯いた。

「だったら、コールはいったい、どこの誰だと思っていた？」

「……？」

僕の問いかけに、ジーンは再び顔を上げて、首を傾げる。

質問の意味を、計りかねているようだ。

「コールは、ジョーカーだと ^{さげす}蔑まれて、ダイア村から追い出されたよ」

ジーンは驚いた顔を向ける。視線が僕からはずれた。その目で、僕の背後のコールを見たようだった。

「コールは、ジョーカーの仲間かもしれないし、そうじゃないのかもしれない。僕には、よく分からない。でも、みんながコールをジョーカーとして狩るというなら、僕は命を懸けてでも守るつもりだ」

「君は、彼女がジョーカーの仲間かもしれないと思っているのに、それでも彼女を守るというのか？」

ジーンが困惑するのも無理はない。

素性を知らなかった、というのなら、話は別だが、僕は既に、コールの正体をおぼろげに知っている。

彼女が人間に危害を加える存在であると、理解した上で、それでも守ると言ったのだから、ジーンの反応は当然だ。

でも、僕にとっては当然でも常識でもなかった。

「コールが頼れるのは、僕しかいないんだ。君が教えてくれたんだよ、ジーン」

その言葉がなければ、僕はコールを、ただのお荷物としか見ていなかったかも知れない。

だからそのことは、とても感謝している。

でも、それだけが、僕がコールを守りたいと思った理由ではなかった。

「それに――」

僕は視線を地面へ向け、静かに言い放った。

「――記憶を失ったジョーカーより、人間のほうが、よっぽど怖い」

人間は、平気で嘘をつく。

どんなに親しい相手でも傷つける。

偽る、騙す、陥れる。

そのことを、僕は今回の仕事で初めて知り、そして、怯えた。

その恐怖が、僕がジョーカーや、コールの存在に対して感じる恐れを、遙かに^{りょうが}凌駕していたのだ。

ジーンが息を飲む音が聞こえた。

「……すまない」

ジーンは謝った。

彼女は聡い。

僕の言いたいことを、苦しいほどに理解してくれる。

「僕は、君に嘘をついた。軽蔑されても、仕方がない」

「僕のことを、信用してくれてなかったんだろう？ だから、たくさん嘘をついた」

「はじめはね、そうだった。でも、君といるうちに、だんだん、楽しくなってきた。ずっと、一緒にいたいと思った。だから、あんなことを言ってしまった」

——僕と一緒にいかないか。

ジーンは、僕にそう言ってくれた。

「君と一緒にいたかった。その気持ちだけは、本当だったんだよ。信じてくれなんて、今更言えないけれど……」

「僕は、ジーンが嘘をついていたなんて思わないよ」

ジーンは僕を見る。目尻が少し塗れていて、わずかな木漏れ日に反射して光った。

「ジーンが男だと思ったのだって、僕が勝手にそう決めつけて、納得してしまっただけなんだし。ジョーカーと一人で戦いながら旅をしているのだって、まだ始めていないけど、これからそうするつもりだったんだろう？」

みるみる歪んでいくジーンの表情に、僕は少し戸惑う。でも、何とか言いたいことを紡いだ。

「だから、その、ジーンは嘘じゃなくて、希望を言ったんだ。これからの目標、やりたいことを、僕に言って、誘ってくれただけなんだ」

「ディース……」

「昨日の返事、まだ言ってなかった。僕はコールを守ると決めた。だから、ジーンの目的とは、少し異なった方向へ進もうとしているのかもしれない。でも、もし、それほど遠くない道なら、一緒に歩いていきたい」

こぼれた。

涙が。

ジーンの白い頬を伝って。

「僕も、僕たちも、ジーンと一緒に歩いていいかな」

僕が笑いかけると、ジーンの間から細い、震える声飛び出した。

「――僕も、君と同じ望みを持った。でもそれは、決して、思っちゃいけなかったことなんだ」

「どうして？」

「僕は、罪を犯した。表のすべてを拒絶し、裏のすべてを受け入れた。だから、君と僕は相入れない。関わってはならないんだ」

「何を言っているんだ、ジーン？」

「……もっと早く、君に出会えていれば良かった。そうすれば、こんなことには……」

「今からでも遅くないさ、僕は君と、友達になりたいんだ！」

僕の言葉に、ジーンは大きく肩を震わせた。

「ダメだ、ダメだ……」

「どうしてダメなんだ、僕には分からないよ。もっと、はっきり教えて……くれ……」

僕はジーンに歩み寄った。

そして、立ち止まってしまった。

さっきまで僕が立っていた場所からは、ジーンの間側の景色が、大きな木によって死角になっていた。

僕が一步踏み出したことで、その死角が姿を現した。

硬直した。

そこには、傷だらけで横たわるファーマリーの姿が。

先刻、僕が鳥かごを開けて、そこから飛んでいったファーマリー。

ジーン、ファーマリーだ。

ボロボロだった。横向けに地面に倒れ込んだまま、動かない。

ここからでは、生きているのか、死んでいるのか、分からない。

でも、僕にはその姿が。

自分のファーマリーと重なった。

「うわあああああ！」

自分の悲鳴で我に返った。

気づけば僕は、ジーンの胸ぐらを掴んでいた。

「ジーンがやったのか!？」

ジーンは頷いた。

頷いて、ほしくなかった。

「どうしてだよ、ファーマリーは、このファーマリーは、ジーンだけの、大切な……」

僕の元には来なかったファーマリー。

僕に出会う前に、殺されてしまった。

きっと、目の前の、このファーマリーのように、ズタズタにされて。

僕のファーマリーも、きっとこんな風になってしまったのだ。

その姿を、想像なんてしたくもなかった。

だが、その光景を、ジーンは演出した、作り上げた。

それも、自分の、もっとも愛すべき相棒を使って。

「こんなこと、許されると思ってるのか！ 僕は、絶対に許さないぞ、こんなの、こんなの!!」

僕がジーンを責めつけている間。

その側を通り過ぎたものがあった。

コールだ。

コールは澄んだ緑眼を瞬きすることなく、歩いてゆく。

横たわった、ファーマリーのところへ。

そして、側に座り込んで、そっと頭を撫でてた。

すると、ファーマリーは、かすかに身体を震わせる。

「――生きてるです。お元気じゃないけど、生きてるです」

僕は、身体から力が抜けていくのを感じた。

ジーンの胸倉から、手を引いた。

彼女は、ぐったり俯いて、涙を流し続ける。

「.....それでも、罪に汚れた僕の手は止まらない。止められない」

自分の身体を、締め付けるように抱きしめて。

ジーンは、自らの意志でこれを行ったんじゃないのか？

次第に怒りが冷めてきて、僕は動揺した。

「ジーンは、こんなことをするつもり、なかったのか？」

ならどうして？

自分の意志じゃないのか？

誰かが、そうしろと言ったのか？

無理矢理、やらされたのか？

ジーンは答えない。

代わりに、その身体が徐々に振動をはじめ、僕は異変を感じた。

「ジーン？ どうしたんだ」

「ディース……」

ジーンは顔を上げた。

その顔は、恐怖に包まれていた。

怯えている？ ジーンが。

一体何に――。

「助けて……」

そう呟いた。

ジーンが、助けを求めている。

「もう、戻れない。それでも、僕は、君の言葉を信じたい。だから、僕も……」

その言葉の続きが、壊れた。

「僕は、僕も、君と、僕と、僕と、ボクと……」

ガタガタと、ジーンの身体が不気味に揺れはじめる。

まるで、壊れたゼンマイ仕掛けのおもちゃのようだ。

[ボクとお友達になってくれるのおおおお!?]

そして、ジーンの首元から飛び出した。

びっくり箱の中身のよう。

あり得ない、化け物が。

「なっ……！」

そいつは、僕の首を引っ掴んだ。

白い顔、赤い鼻、赤い口。星や水玉に囲まれた、細い嫌らしい目。

道化を思わせるその姿と対峙したのは、二度目だった。

「ディースたん！」

コールが悲鳴を上げる。僕は首根っこ背中を捕まれて、宙に浮いていた。

ジーンの首元から、身体を突き破ったかのように飛び出してきたそいつは、僕を見てにんまり笑う。

手下のように、板にははまっていなかった。

より、人間の道化に近い姿をしているが、ひよろひよろして、細長い。その姿のおぞましさは、それが人外のもであることを、強烈に印象付けている。

[嬉しいなあ。お友達になってくれるなんて、嬉しいなあ！]

「くっ、ジョーカー、か……？」

「そうさ。ボクはジョーカー。手下とは、またひと味違ってハンサムだろ？ うふふ」

別に対して変わらない。

化け物であることに、変わりなんかない。

だが、確かに手下に比べて、すさまじいプレッシャーを放っていた。

ぜんぜん対等に感じない。

僕は獅子に掴まれた猫も同然だった。

「お前、ジーンをどうしたんだ！ ジーンの身体を、乗っ取ったのか!?!」

それでも、恐怖を押さえつけ、ジョーカーに怒鳴りつける。

ジョーカーは鼻で笑った。

[乗っ取るだなんて、人間きの悪い。この身体は、このお嬢さんから貰ったのさ]

「嘘だ！ ジーンがそんなことするわけ……」

[このお嬢さんは、何もかもが嫌になってしまったのさ。親や知り合いたちは、みんなファーマリーのことばかり。自分のことなんて、誰も見てくれやしない。思ってくれやしない。そんな世界に絶望したのさ。ボクが誘ったら、すぐに話に乗ってきたよ]

さも、嬉しそうに語る。

絶望が、至福の喜びだと言わんばかりに。

[チミも、この子のお友達になるんだろう？ いいとも。おいでよ、大歓迎さ。この子も一人で寂しかったんだ。チミが一緒なら、きっと喜ぶだろうさ]

「違う！ ジーンは助けてと言った！ 本当は、ジョーカーになんて捕まりたくなかったはずだ！」

ジーンは分かっていたはずだ、自分の行いが過ちであることを。

でも、それを取り返しのつかないものにしてしまったのは、ここまでジーンを追いつめたのは、こいつじゃないのか。

[僕は彼女の、強い強い思いに同感して、手を貸してあげただけさ。嫌な現実から逃げるための力を、自分を追いかけてくる嫌なギフトを倒すための力を、憎きファーマリーをやっつける力を！]

僕はこめかみを^{けいれん}痙攣させた。

ミーシャをあそこまで満身創痍にしたのも、ファーマリーをあんな姿にしたのも、全部こい

つだ。

[何にしても、もう後戻りはできない。この身体は返さないよ。この身体はボクのものだからね。操って人間の子供を狩るのもよし、新鮮なうちに食べちゃうのもよし！ 思うがままさ]

「させるか、そんなことお！」

僕は腕を伸ばす。

ジョーカーの顔に届くか、届かないか。

その寸前で、逆にジョーカーの腕が伸びてきた。

その手が、僕の顔を掴んで握り潰そうとする。まるで、卵でも割るみたいに。

「ぐああっ！」

[たかがクソガキ一人に、何ができるっていうのさ]

少し苛立った口調で、ジョーカーはドスの利いた声を吐く。

[反抗的な子供は嫌いだ。お前みたいな使えそうにない奴は、さっさと食っちまうに限る]

ジョーカーは口を開いた。耳元まで裂ける、大きな口を。

[いったっだきまーす♪]

僕の頭を、口の中の領域に突っ込もうとした時。

[んがっ！]

その顔が横へ吹っ飛んだ。

その弾みで、僕は解放され、地面へ落ちる。

起きあがると、隣には二本の足が。

見上げると、そこには一人の男が立っていた。

茶色いスーツに身を包んだ、立派な紳士。

手に持ったステッキを剣代わりに、ジョーカーに向けて構えていた。

「間一髪ですな」

その声に、僕は目玉が飛び出しそうになるほど、目を見開いた。

スーツの背中から飛び出した、二対の透明な羽。

それがファーマリーである、確固たる証拠だ。

こんなファーマリー、僕は他に見たことがない。

だが、白い口髭には、見覚えがある。

「お、お前、ギルバート!？」

信じられなかったが、恐らく間違いない。ギルバートだ。

「何、そのダンディーな紳士姿！」

「戦闘体型ですな」

ファーマリーは戦闘体型をとると、人間と同じ大きさになり、戦うための武装をする。

彼のそれは戦うスタイルではなさそうだったが、それでもその姿からは、強さと逞しさが滲み出ている。

「お前、ただの酔っぱらいじゃなかったんだな。そんな姿になれるなら、もっと早くなってよ！」

「機会がありませんでしたな」

淡々と返事をしてくる。その態度も、何だかダンディー。

こいつはもはや、妖怪でも酔う精でもない。

妖精を超越した存在。

傭精だった。

僕は感動し、同時に落胆もした。

「お前がこんなすごい奴だって分かってたら、僕もあんなに悩まなくて済んだのかな……」

もし知っていたなら、すぐに自分のファーマリーとも見切りをつけられたかもしれない。

「そんなことを言うものではありません。犠牲になったファーマリーに対して、失礼です」

そう呟く僕を、ギルバートは叱りつけた。

そして、優しく言いなおした。

「これでよかったのですよ」

「え……？」

「人間、悩まなければ前へは進めませんからな」

そう。そうだよな。

また、弱気になりかけていた。

僕は自分のファーマリーを信じていた。

その気持ちを、今になって足蹴にしちゃいけない。

結果はどうあれ、自分がなにを信じて、どう進んできたか。

それが、一番重要なんだ。

僕は気持ちを取り直し、ギルバートに叫んだ。

「ギルバート、ジーンを助けたいんだ。手を貸してくれ！」

快諾してくれると思っていた。

だが、ギルバートは表情を曇らせる。

「……それはちと、難しいですな」

「どうして！ ジョーカーを倒せばいいんだ、お前なら、簡単だろう？」

「ジョーカーを倒すのは、造作もないこと。しかし、奴は彼女に寄生しております。その度合いにもよりますが、今ジョーカーを倒せば、同時に彼女も……」

「な……」

ジョーカーの死は、ジーンの死に繋がる。

ギルバートはそう言いたいのだ。

僕の顔から血の気が引いた。

「じゃあ、どうすることもできないの？」

「ジョーカーが彼女の身体を住処にしていなければ、それは容易なことなのですが……」

ギルバートのこめかみを、汗が流れる。

やっぱり、無理なのか？ 焦りが広がる。

[くっそー！ いったいな、このやろー！]

そうしていると、顔を吹き飛ばされて昏倒していたジョーカーが我に返った。

そしてすかさず、拳を繰り出してくる！

ギルバートは僕を庇いつつ、攻撃を避けた。

しかし躲しきれず、その強烈な一撃を左膝に受ける。

ギルバートは地面に反対の膝を突いた。

「ギルバート！」

「くっ……無念」

「大丈夫か！」

「あ、頭が……」

「頭!? でもさっき受けた傷は足に……」

苦痛を顔に浮かべて、ギルバートは頭を抱えた。

「……二日酔いですなあ」

……。

日頃の怠慢の成果が、こんな場面で。

予期できたような。でも予期できなかったことに、僕は硬直した。

「……やっぱりお前、使えないな……」

強いのは強いのだろうが、今の状況、一番の役立たずだ。普段と変わらないじゃないか。

そんなことを考えている内に、僕は再びジョーカーに捕らわれた。

「うわっ！ 何するんだ、離せ！」

[うるせー！ 邪魔が入る前に食ってやるんだ、てこずらせやがって！]

「邪魔……？」

ジョーカーは焦っているようだった。

その理由が分かったのは、その直後のことだった。

僕がやってきた方角から、続々と足音が流れ込んできた。

「ディース！ ああ、何てこと！」

「姉さん……」

先頭を切って突っ込んできたのは、姉さんとソフィアだ。

後ろから、手当を終えたミーシャと、それを支えるように連れ添うアルルもやってきた。

「私が、ただの小娘に、あれほどの手傷を負わされるわけがないだろう！ 早合点するところは姉弟そっくりだな」

呆れたように、ミーシャは僕を怒鳴りつける。

姉さんが恥ずかしそうに赤くなっていた。

「アルル、戦闘体型！」

ミーシャがそう指示すると、彼女のファーマリー——アルルが光に包まれ、人間と同じ大きさになった。

赤い鎧を身にまとい、大きな剣を構えている。

見るからに強そうなファーマリーに、ジョーカーは少し怯んでいた。

「待ってください、ミーシャ！ あなた方の攻撃は強力すぎます、下手をしたらディースまで……」

姉さんはミーシャを止めようとしたが、彼女は聞く耳を持たない様子だ。

「自分勝手なガキには、少くお灸を据えてやればいい」

「少しじゃ済みませんって、お願いですから少し待って！」

「だったらどうする、このままでは結局ジョーカーの餌食になるぞ！」

「ソフィア、どうにかならないの？ このままではディースが……！」

「あたしにそんなこと言われても……」

姉さんの側で、既に戦闘体型を整えていたソフィアは、困ったように眉を顰めた。

僕が、足枷になっている。

だが、それはある意味で好都合かもしれない。

あのファーマリーたちに袋叩きにされたら、ジョーカーはたまったものじゃない。

それは即ち、ジーンにも同じことが言えるからだ。

ジーンを助けたい。

その方法を、考えなくてはならない。

僕が捕まっている間は、その時間を稼ぐことができる。

……食べられなければの話だが。

そんな恐怖と戦いながら、僕はこいつをジーンから引き離す方法を考えていた。

「えい、えい、えいっ！」

だが、考えがまとまる前に、集中力が乱された。

下の方から聞こえる声に、反応してしまう。

「ディースたんを離しなたい！ えいっ！」

それは、ジョーカーに殴りかかる、コールの声だった。

何の計画性もなく、ただがむしゃらに腕を振り回して、ジョーカーをポカスカと殴っている。

[何だぁ、お前は！ 邪魔するな！]

だが、そんな攻撃で、ジョーカーにダメージは与えられない。

神経を逆撫でしただけに終わった。

コールは苛立ったジョーカーに殴りとばされ、地面に倒れる。

「や、やめろよ！ お前の仲間だろうが！」

僕は慌てて声を張り上げる。

ジョーカーがジョーカーを攻撃するなんて。

こいつらには仲間意識がないのか？

[仲間ぁ？ しらねーよ、こんなトロくさい奴！]

ジョーカーは怒鳴って吐き捨てた。

「い、今は記憶をなくしているらしいけど、この辺りを彷徨っていた、ジョーカーが操っていた子供なんだろう!？」

[ジョーカーの眷属に染まった奴が、記憶をなくすかよ！ そんなヘマするドジ、同業にはいねーよ！]

ジョーカーの言い草に、僕は動揺する。

コールは、ジョーカーの仲間じゃないのか？

僕の中で、何か錘のようなものが外れた感覚がした。

一種の安堵感が、僕の身体の手を抜いていく。

コールは、ジョーカーじゃなかった。

その事実が、僕を重圧から解放してゆく。

「じゃ、じゃあ、この子は……？」

[知るか！ どっかの頭のおかしなガキだろうが！]

ジョーカーは、起きあがったばかりのコールに再び、拳をぶつけた。

「あうっ！」

コールは、また地面に転がって倒れる。

「や、やめろ！」

コールの悲鳴に、僕の思考は遮断される。

どこの誰で、何者かなんて、もう関係ない。

コールはコールだ！

「逃げろ、コール！ このままだと殺されるぞ！」

僕は必死で叫んだ。

だが、コールはまた立ち上がり、こちらに向かって歩いてくる。

打ちつけられた身体は痛いだろう。とても、怖いだろう。

なのに、コールはジョーカーを睨みつけることをやめない。

「助けるです、ディースたん、助けるです！」

「やめろ、コール、やめろ！」

僕の声は、コールに届かないのか。

コールは強い決意を秘めた瞳を、普段以上に輝かせていた。

涙で、濡れている。

「もう、探すの嫌です、ずっと一緒にいるです！」

コールは叫びながら、涙を流す。

そして、足を引きずりながら歩いてくる。

その姿に、さらに苛立ちを覚えたジョーカーは、拳を降りあげる。

今度食らったら、コールの身体が――。

「やっぱり、あの子……」

ジョーカーの拳が降り下ろされる。

しかし、その軌道が途中でそれた。

ソフィアが飛び出してきた、剣ではじいたのだ。

[おっと、邪魔するなよファーマリー！ このガキがどうなってもいいのか！]

ジョーカーは僕を盾にとって、ソフィアの攻撃を制止させようとする。

周囲の反応から、僕が人質として機能する事を察知したようだ。

しかし、ソフィアは直接ジョーカーと対峙するつもりはないらしい。

彼女はジョーカーを牽制しつつ、倒れそうになっていたコールを支えた。

「――思い出しなさい、あなたのすべきことを」

そして、語りかける。

コールの目が大きく見開いた。

「すべき、こと……？」

「本能のままに動いては駄目。大切なものを守りたいという気持ちを、そのために戦いたいという想いを、自分の力に変えるのよ」

「ちから。助けたい、守りたい。……ディースたん!!」

コールの叫び。

それが森の中に響く。

コールが強烈な光を放ち、その中に包まれたのは、直後のことだった。

ジョーカーが悲鳴を上げる。

僕も眩しくて、目を閉じた。

「なっ、この光は……」

「まさか……!？」

ミーシャと姉さんの声が聞こえた。

ジョーカーの腕から力が抜け、僕は地面に落とされる。

やがて瞼の向こうの光が収まり、僕はゆっくり、目を開いた。

側ではジーンが倒れていた。その首元から飛び出ているジョーカーも、昏倒していた。

さっきの光に当てられたようだ。

僕は光の源——コールのほうを見た。

そして、目を奪われた。

ソフィアに支えられたコールの姿が、変化している。

ボロボロだった服は、しっかりとした衣服へと形を変え、その上から簡易な防具を身につけていた。腰には細身の剣がぶら下がっている。

くすんで汚れていた灰色の髪は美しい銀髪になり、輝いていた。僕がつけてあげた髪飾りが映え、とても美しい。

コール自身も、何が起こったのか分からないらしく、目をぱちくりさせていた。ソフィアから離れ、くるりと一回転する。

その時に、見えた。

コールの背中から生えた、透明な羽が。

しかも、それは左右非対称であった。

片方の羽が、根元で千切れたように、なかったのだ。

あの失われた羽を、僕は見たことがある。

村の、ギフトの事務室。

金庫の中から姉さんが取り出して見せてくれた、僕のファーマリーの形見。

「……コール？」

僕は、無意識に呼んでいた。

僕が、自分のファーマリーのために、一生懸命考えた、名前を。

「あなたは、ファーマリーよ。長い間、ご主人様に会えなかったから、戦い方を知らなかっただけ。記憶と共に、本当の姿を失っていたのよ」

ソフィアは笑って言った。

「でも、今の力の解放で、思い出せたはず。この子は、ディースのファーマリーよ」

さっき、ソフィアがコールを見て顔を顰めたのは、彼女が宿敵であるジョーカーだったからではなかった。

彼女が、自分と同じ種族であると、気付いたからだったんだ。

コールは惚けた顔をして、僕を見た。

「ディースたん……！」

そして、僕のところへ飛び寄って、抱きついてきた。

「やっと、やっと会えたです……！」

コールの姿が、滲んだ。

「ファーマリー……。僕の……？ コールが……」

「そ、そんな、もう十年も経ってるのよ、そんなに長い間、無事で……」

姉さんの動揺する声が聞こえた。

あり得ないことだ、確かに。

もし、これが事実なら、コールは本当に、十年の年月を掛けて、長い道のりを歩いてきたことになる。

僕が計算して、予測したとおりに。

「全部、思い出したです。十年前、ここへくる途中、ジョーカーに襲われたです。私を連れてきてくれた人、ジョーカーと戦って、その隙に私を逃がしてくれました。名前の入ったプレートをくれて、クラブ村のディースたんを探せと言ってくれました。探して、探して、そして必ず出会って、幸せになるようにと」

ああ、あのプレートにはそんな意味と、想いがあったのか。

どこかで拾ったわけでも、ジョーカーが獲物の指標として渡したわけでもない。

正真正銘、僕のところへ来るための、唯一の片道切符だったのだ。

「そして、少し成長できたら、ジョーカーに見つからないように常に人の姿を保って、隠れて移動しなさいと。ファーマリーの気配を放ってれば、人間の姿で一人で歩いていても、ジョーカーは近寄ってこないからと。だから、人間でないことがばれないようにしなさいと。ジョーカーに気付かれたら、狩られてしまうから」

あの寝言の真意も、僕が勘繰っていたものとは、かけ離れた意味があった。

彼女は、ギフトに言われたことを忠実に守り、実行して、気の遠くなるような長い時間を生き抜いて、ここまでやってきたのだ。

コールの姿が、よく見えない。

こんなに近くにいるのに。もっと、ちゃんと顔が見たいのに。

涙で、何も見えない。

すぐ側で、僕に触れているコールの手は、震えていた。声も、震えていた。

「ずっと、ずっと歩いてきたです。寂しかったです。早く、早くディースたんに会いたかったです」

子供の頃。

僕は自分のファーマリーが側になくて、とても寂しかった、怖かった、苦しかった。

コールだって、そうだったのだろう。

胸が張り裂けそうだった。

コールの声は、大きな試練を乗り越えた達成感に満ちていた。僕にしがみつき、嬉しそうに泣いた。

「そんなに長い間、僕のことを探して……、ボロボロになって……」

助けてくれるものなんて、ほとんどいなかっただろう。

着の身着のまま、人気のない道を歩いて。

口に入れられそうなものなら、何でも食べて。

ジョーカーの陰に怯えながら、ここまで。

辛かっただろうに。苦しかっただろうに。

「ごめん、僕、全然気付かなくて。ジョーカーの仲間じゃないかって、疑ったり……！」

「ディースたん、お優しいです。コールって、名前くれました、いろんな事、教えてくれました……守って、くれました」

僕はコールを抱きしめた。

僕の、僕だけのファーマリーだ。

「コールっ、コール！」

何度も何度も、その名前を呼んだ。

「あい、ディースたん」

その度に、暖かい、優しい返事がすぐにくる。

こんな幸せが、他にあるだろうか。

最後で最初の戦い

「奇跡だわ、こんなことって……」

「ルーシー、泣いてないで、早く指示をちょうだい！ 奴が動けなくなっているうちに、止めを！」

だが、いつまでの感動の余韻に浸っているわけにはいかなかった。

ソフィアは今の内に、ジョーカーに引導を下そうとしていた。

確かに、奴が気を失っている今がチャンスだ。

「待てよソフィア！ こいつはジーンなんだ！ 殺しちゃダメだ！」

だが、僕はそれを制止した。

今、ジョーカーを殺せば、ジーンも死んでしまう。

「バカ言ってんじゃないわよ！ ジーンはもうジョーカーに乗っ取られたのよ、どうにもならないわ！」

「それでも、どうにかするんだ」

そうだ、絶対に諦めない。

僕は十年も、ファーマリーを諦めなかった。

そのお陰で、コールに会えた。

諦めなければ、信じ続ければ、頑張り続ければ。

叶わないことなんてないんだ。

「ジーンは絶対に助ける！ 僕が、絶対に！」

その思いだって、きっと叶うはずなんだ。

ジーンは、僕の想像した、カッコ良くて、憧れの旅人なんかじゃなかった。

でも、僕はジーンに助けてもらった、たくさんのことを教えてもらった。

だから、僕もジーンを助ける。そして、教えてやるんだ。

「手遅れなんてことない。道を誤ったって、絶対に、信じていれば、何度でもやり直せるんだ！」

ジーンは罪を犯した。

いろんな人を騙した。大切なものを傷つけた。

でも、ジーンはそのことを悔いている。

その気持ちがある限り、ジーンはもう一度、陽の当たる道を歩けるはずだ。

[ぐうっ！ こ、こりゃ一体なんの悪夢だ……]

ジョーカーが目を覚ました。

ジーンの身体を起こし、辺りを見回して動揺している。

[右もファーマリー、左もファーマリー。……東を向いても西を向いても南を向いても北を向いても……]

そして周囲の状況を把握し、自分が敵に囲まれていることに気付くと、発狂したように叫び始めた。

[冗談じゃねえー！ なんだってここはファーマリーだらけなんだよー！ あー気持ち悪っ！
うぜえ！ 胃がムカムカするー!!]

頭を抱え、道化はもがく。

周囲に戦えるファーマリーが三体も。戦闘不能の者を含めれば、五体もいる。

ジョーカーにとって、今のこの空間は拷問部屋のような不愉快さをもたらすようだ。

[いつの間にかアリンコみたいにウジャウジャ沸いてきやがって、気色悪いったらないぜ！
ファーマリーって奴らはよ！ だから嫌いなんだ、集団で群がりやがって！]

「コール……！」

ジョーカーが喚いている際に、僕はコールに耳打ちした。

「ジーンを、助けたいんだ。僕が何とか方法を考える。だから、力を貸してくれ」

「……あい！」

コールは力強く頷いてくれた。

[あーもー、うざいから片っ端から食らいつくしてやる！ どいつからだ、どいつから食われたい!?]

ジョーカーの狙いが、コールに定まった。

[てめえ、ファーマリーだったのか。うっとおしいガキだとは思ったが……。目障りなお前から食うぞ！]

コールに飛びかかろうとするジョーカー。

突然のことで、僕もコールも身動きがとれない。

「ソフィア！」

「アルル！」

背後からの重なった声。

それとほぼ同時に、二体のファーマリーの剣が、コールの目の前でクロスする。

それが障壁となり、ジョーカーを弾き返した。

「姉さん……。ミーシャ、さん……？」

僕は驚いて振り返る。

姉さんに支えられて、何とか立っているミーシャは、鋭い眼光で僕を射た。

「そこまで啖呵^{たんか}を切ったんだ、救えるものなら救って見ろ」

「私たちがサポートします。頑張って、ディース」

姉さんの優しい声が、勇気を与えてくれる。

「早くしてよ！ 倒すよりも守るほうが、大変なんだから！」

ソフィアが怒鳴る。

ジョーカーがキレる。

[邪魔するな！ 邪魔するならお前から先に……げふっ！]

そう叫んだ矢先、その顔にステッキが突き刺さる。

「こういうレディー・ファーストは、感心いたしませんな」

二日酔いで倒れていたギルバートの、渾身の一撃だった。

[ぐおおおのおおおおお!! バカにしやがってえええ!!]

ついに怒髪天を抜いたか。

ジョーカーは白い顔を真っ赤にして、怒り狂った。

しかし、その身体が急にこわばる。

[な、なんだ、身体が言うことを……]

震える身体。

ジーン的首が、ゆっくりと上を向く。

萎れた花が、息を吹き返したように。

「ジーン！」

「で、ディー……す……」

ジーン意識が戻ったのだ。

ジョーカーに対抗しようと、身体を必死に止めている。

[てめえ、この大変な時に邪魔すんな！ お前の身体は、もう俺の物なんだ！ 所有物は黙って大人しくしてろ！]

「僕は……もう、誰も傷つけない。お前の、言いなりには、ならない！」

ジーン心からの叫び。

彼女はジョーカーの根元に向かって視線を投げかけ、睨みつけた。

「……そうか！ それなら！」

僕はコールに耳打ちした。

僕の話聞き、コールは強く頷いた。

「ソフィア、アルル、こいつの注意を引いてくれ」

僕の指示に、二人は顔を見合わせ、頷いた。

そして、ジョーカーに剣の先端を突きつける。

[くっ、てめえら！]

「ジーン、今助けるぞ！」

その隙に、僕は駆け出した。

そして、側の大木によじ登る。

かなり上まで登り、枝に飛び移った。位置は地上の戦場の中心。

ジョーカーの、ちょうど真上だ。

僕は蔦を掴んだ。

それを察知し、ジョーカーが上を向いた。

[おっと、それはいつぞやに、あのギフトの女をやっつけたのと同じ戦法だな。そこから飛び降りて、俺を攻撃するつもりか？ こいつの中から見させてもらっていたよ。だから、同じ手は通用しねえ！]

ジョーカーは身体を上へと伸ばしてきた。その勢いでソフィアたちを弾き飛ばす。

[待ってろ、すぐに引っ張り下ろして、今度こそ食ってやる！]

奴は僕に手を伸ばしてきた。

その指の先端が、僕に触れる直前。

動きが止まった。

[くっ、あとちょっとなのに、届かない……！]

ジョーカーは必死で身体を、腕を伸ばした。

しかし、届かない。

なぜかと怪しんで、下を見ると。

ジーンが、それ以上ジョーカーが動けないようにと、必死で足を踏ん張っていたからだ。

[このアマァ!]

ジョーカーは標的をジーンに変えようとした。

ジーンを気絶させて、また身体を乗っ取るつもりらしい。

だが、そうはさせない。

僕は鳶で身体を支え、空いた手でジョーカーの腕を掴んだ。掴んで、思いっきり引っ張った。

[ギャーいてー！ コラ、引っ張るな、千切れる!]

上から僕、下からジーンが奴を抑える。これで奴は身動きが取れなくなった。

全て、僕の計算どおりだ。

「コール、今だ!」

僕は叫んだ。ジョーカーがハッとしてコールを見るが、もう遅い。

コールは剣を握りしめ、胸の前でまっすぐ構えていた。

狙いは、ジーンの首もと。

[ちょ、ちょっと待て、やめろ!]

慌てふためくジョーカー。その悲痛な叫びに心を動かされるものは、残念ながらいない。

動いたのは、コールの身体だった。

体勢を崩すことなく、まっすぐ切っ先をジョーカーへ向け、疾走する!

「いっけえええええ!!」

剣の先端が、ジーンの首に突き刺さる。

正確には、ジーンのジョーカーの、宝石を直撃する。

ピシッと、宝石に^{ひび}罅が入った。

[んなっ、なあああああ!!]

宝石が粉々に砕け散る。その音は、ジョーカーの断末魔の悲鳴によってかき消された。

ジョーカーが灰のように砕けて、消え去る。

ジョーカーはジーンの身体に寄生していたわけではなかった。

ジーンが首につけていた、ジョーカーの赤い宝石に宿って、そこからジーンを操っていたのだ。

彼女の首元へ向けた視線が、それを僕に気付かせてくれた。

——人間であらざるとは言え、所詮は道化。そこには何かしらのトリックがあるのかもしれないね。

そう言った姉さんの言葉が、僕に確信を持たせた。

ジョーカーは倒せる。ジーンも助けられる。と。

そして、それは現実のものとなった。

ジーンがその場に倒れ込む。コールもその場に足を折った。

僕は木から飛び降りて、駆け寄った。

へたりこんだコールを支え、そしてジーンに声をかける。

「ジーン！ 大丈夫か、ジーン！」

「大丈夫、気を失っているだけみたいよ」

ソフィア言葉に、肩の力が抜けた。

「ジーンたん、お元気です？」

コールが、心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ああ、無事だよ。コールのおかげだ、ありがとう！」

僕はコールを抱きしめた。

「ディースたんに誉めてもらったです……。うにゆう～……」

僕の腕に顔をすり寄せ、コールは嬉しそうに鳴いた。

「私、私、夢でも見てるんじゃないかしら……」

遠くから、姉さんのおえつ嗚咽と、震える声。

「ディースがあんな立派に戦って。ファーマリーもやってきて。ジョーカーを相手に戦ったのに、誰も犠牲が出なくて。こんな、こんなことって……」

「親バカめ」

それを聞いていた、ミーシャが鼻で笑った。

「だが、夢じゃなくて良かったと、今なら言えるな。まったく、無茶をしたもんだ、お前の弟は」

「よかった、よかったわね、ディース……！」

本当に良かった。

そう、心から思えたことが嬉しくて。

歓喜の震えが止まらなかった。

ただいまの、その次

ジーンは、命に別状はなかった。

彼女のファーマリーも、辛うじて生き永らえた。

ミーシャも含め、大怪我を負った三名はダイア村へ戻り、療養をとることになった。

担架に乗せられて病院に運ばれる直前、ジーンは僕に向かって、声を掛けてきた。

「僕のやってきたことは、決して許されない禁忌の所業だ。それでも、まだ許される道があるのなら、償いたい」

「大丈夫さ。いくらでもやり直せるよ。今はまず、怪我を治さなくちゃ」

僕の返事に、ジーンの表情に微かな笑顔が戻った。

「もし、僕の罪が許されて、胸を張って前へ進めるようになったら、――また、会ってくれるかな」

「もちろん。待ってるよ」

僕はジーンと固く握手を交わし、別れと再会を約束した。

◆ ◆ ◆

ダイア村で諸々の手続きや書類の整理を終えて、僕たちはクラブ村へと帰ってきた。

「あ、旗です」

村の門前で、コールが屋根を指さした。

戦闘体型を解いたコールは、服こそ見窄らしい姿に戻ったが、髪は美しい銀色を維持していた。爽やかな風に、綺麗に靡なびいている。

記憶を取り戻したコールは、妖精の姿も思い出し、掌に乗るくらいの大きさに戻った。羽が片

方なくてうまく飛べないから、今は僕の肩にちょこんと座っている。

僕も空を見上げて、笑った。

「コールが、道に迷わずに村まで来れるように、僕が立てたんだ」

「あれ、コール、森の中で見たです。たかーいところに、おっきな旗があって、びっくりしたです。それで、見つめてたら、足を滑らせて転んだです」

「え……」

まさか、それで気を失って、そのまま記憶喪失になったんじゃ……？

僕は脂汗を流した。

側で、ソフィアとギルバートが呆れたように、馬鹿にしたように、にやにや笑っている。

自業自得だと、茶化そうとタイミングを見計らっているようだ。

「でも、目が覚めたらディースたんに会えたです！　すごいです！」

コールはそんなことには気付いていない様子で、僕に尊敬の眼差しを向けてくる。

「そ、そうだな。すごいな。ははは……」

こんな旗立てなきゃ、コールは何もしなくても村にやってきたのかもしれない。

そう思うと、自分が恨めしかった。

でも、それだけじゃ、僕はこんなにも成長できなかった。

いろんな人にも会えなかったし、ジーンだって助けられなかった。

だから、これでいいんだと思った。

門をくぐり、ギフトの事務所の入り口に立った姉さんが振り返り、笑う。

「ひとまず、私たちクラブ村のギフトのお仕事は、これにて完了です。お疲れさまでした、ディース。よく頑張りましたね」

僕は笑い返した。

「僕、ギフトの仕事をやってみて、思ったんだ」

「そうね、私もそう思います」

「僕の言いたいことが何となく理解できるのは分かるけどさ、ちゃんと最後まで言わせてよ、頼むから」

「あら、ごめんなさい。またいつもの癖で」

姉さんは口を手で押さえて、恥ずかしそうに頬を染める。

姉さんは姉さんなりに、この早とちりの癖を直そうとは思っているらしい。

少しずつ、前へ進もうとしているのだ。

でも、治るのは、きっとまだまだ先だろうな。

「それで、何を思ったのかしら？」

「僕、ファーマリーがいないって聞いたとき、これからは全部、何もかも一人でやっていかなきゃいけないって思った。でも、結局、僕が一人でできることなんてたかが知れてて、いろんな人に助けてもらわなきゃ、何もできないんだなって実感した。それは僕だけじゃなくって、たとえば、ジーンやミーシャさんや、それに姉さんだって同じだと思うんだ。だから、僕はこれからは、いろんな人を助けていけるように、少しずつでも頑張っていきたい」

人は、一人では生きていけない。

無理をして、孤独に苛まれれば、ジョーカーに裏を掻かれる。身を滅ぼすことになりかねない。

これからも、一人で無理をしている人がいれば、助けたい。

今まで助けてもらった恩を、返して行きたい。

「良かった」

それを聞いた、姉さんは優しく微笑んだ。

「私も、似たようなこと、考えてた」

姉さんの返事は、ただの早とちりじゃなかった。

そのことが、とても嬉しかったらしい。

僕も、嬉しかった。

「なら、これからも頑張らないとね。ギフトのお手伝いもしてもらいますけど、当面は――」

姉さんの視線が、僕の隣に移る。

僕も隣を見た。

すぐ隣で、僕を見つめ返して笑っている、女の子。

「当面は、その子の面倒を見るので精一杯かもしれないわね」

僕はコールの頭をそっと撫でた。

右側の額の上部には、僕があげた、羽の形の髪飾りが光っている。

十年にわたる、ファーマリーを待ち続けた苦悩の日々は、ただの災難じゃなかった。

長い時間をかけて、僕が成長するチャンスを与えてくれた、ファーマリーからのプレゼントだったんだと、今は思う。

嬉しそうに笑顔を向けてくるコールに笑みを返しながら、僕は考えていた。

この「妖精からの贈り物」^{フェアリースピリット}に対して、何をどうやって返していこうかと。

了

あとがき

本作をお読みいただき、ありがとうございました。

幹谷セイ、通算二冊目の電子書籍作品になります。如何でしたでしょうか。

楽しんでいただければ幸いです。

西洋をイメージした異世界を舞台にしたファンタジー。少し御伽話のような、童話のような雰囲気を出して作ったお話です。

魔法など複雑な世界観は特になく、描写も少なめにしています。その分、読み手の想像力をより自由に膨らませることができると思います。

ファーマリーと呼ばれる妖精と人間の絆、そして少年の成長をテーマとした、小さいけれど壮大な冒険物語となりました。

本作は、かなり前に描いた作品を改稿、再編集したものになります。

何でこんな話を書こうと思ったのか、いまいち記憶がないのですが、色々と試行錯誤を繰り返して葛藤していた頃の作品です。相変わらず、どんでん返しに拘っていますね。未熟な面が結構出ていますが、可能な限り修正をして、普通に読めるレベルに昇華できたと思います。

表紙イラストは、商用無料サイトの写真を加工して作らせていただきました。なかなか美しい表紙になったので満足しております。

今回も、電子書籍を作成するに当たって使用させていただいたソフト開発者様、分からない時に参考にさせていただいたサイト様に、この場を借りて感謝申し上げます。

この作品で初めて幹谷の名を知った方は、もし気に入ってくださいましたら他にも電子書籍を出版しておりますので、手に取っていただくと嬉しいです。

ファーマリーズ・ギフト

幹谷セイ 著

初回発行日 2017/11/5

価格 無料

発行 みきやbooks

表紙写真 pixabay

書籍紹介サイト

[みきやbooks](#)

[Facebookページ](#)

この物語はフィクションです。実在の人名、地名等はいっさい関係ありません。

当書籍はデジタル著作権管理 (DRM) フリーですが、文章内容等は作者が著作権を保有しております。

純粋な読書鑑賞以外の用途での無断使用、改変、自作発言、その他著作権を侵害する行為は固くお断りいたします。

ファーマリーズ・ギフト

<http://p.booklog.jp/book/118332>

著者：幹谷セイ（せい。）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mikki0723seim/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118332>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト